四精霊の伝説

沢崎 果菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四精霊の伝説

【Ｎコード】

Ｎ０６９６Ｃ

【作者名】

沢崎　果菜

【あらすじ】

南の港町（サウスポート）が正体不明の敵の襲撃を受け壊滅――？　父の影を追って、少年と少女は南を目指す。そして、家族とはぐれた少年、隣国の少女を加えた四人の、北を目指す旅が始まる。

王国の将軍の息子と幼なじみの王女とその仲間たちが、あちこち旅したり冒険したり多少バトルしたりなファンタジー物語です。

翼持つもの

（1）

バートは乗用陸鳥（ヴェクタ）に乗って草原を駆けていた。目の前には若葉色の草原がどこまでも広がっていて、心地良い風が頬に当たる。しかし、乗用陸鳥（ヴェクタ）に乗るバートの顔はこわばっていた。

目的地はまだ見えない。

「……ト。バ……トおっ」

風の音に混じって少女の高い声が耳に届いた。バートは驚いて振り返った。もう一匹の乗用陸鳥（ヴェクタ）が、バートの少し後ろを走っていた。乗っている少女の金髪の髪が揺れている。そこから少女は、声を限りにバートの名を叫んでいた。

バートは自分の乗用陸鳥（ヴェクタ）の速度をゆるめた。少女の乗ったヴェクタがすぐそばまで追いついてきた。

「……何しに来たんだよ」

バートは不機嫌に少女に声をかけた。

「あたしも一緒に行こうと思って。サウスポート」

少女はバートをまっすぐに見つめて言った。サウスポートはピアン王国最南の港町で、今まさにバートが向かおうとしている町である。

「お前が？！」バートは驚いて大声を上げた。

「お前、自分の立場とこれから行くところの状態、わかってるのか？　……ってか、いくらなんでもまずいだろ、お前が動いちゃあ」

「どうしてあたしが動くとまずいのよ」

少女が言い返してきた。

「王女って何のためにいるの？　こういうときのためでしょ。こういうときに動かないで、何が王女よ」

そう言われてしまうと、バートは何も言い返せない。彼女の言葉

は筋が通っているようで、どこかしら強引なような。
「それに、お父様の了解はいただいたわ」
と少女は言う。バートはそれはあやしいなと思ったが、バートはどうしてもサウスポートに行かなくてはならない。するとこの少女も当然、ついてくるだろう。ということは、二人でサウスポートに向かうしかない。
「仕方ないな……」
バートは観念してため息をついた。
「ていうか、良く追いついてこれたよな。お前のヴェクタってそんなに速度出るのか？」
「ええ。ピアン王国最速のヴェクタを拝借してきたの」
「良いな。俺もそっち乗って良いか？」
「良いけど、二人乗りになると速度落ちるわよ？」
「ああそっか。じゃあ、このまま行くか」
「……良かった。最初すごい顔してたけど……意外と元気そうだから」
少女はぽつりとつぶやいた。この少女は自分を心配して、王国最速のヴェクタで追いかけてきてくれたのか――と、バートは思った。

＊

バートを追いかけてきた少女の名はサラという。年齢は十六歳。とても可愛らしい顔立ちをしているが、こう見えて本格的な体術を叩き込まれており、そこいらのピアン一般兵より強かったりする。今は金髪の長い髪を後ろでくくっており、動きやすい武道着を身に着けていた。
サラはピアン王の一人娘で、ピアン王女ということになる。バートは父親がピアン王に仕える将軍だったため、幼い頃から王宮に出入りしており、サラとは幼なじみの仲だった。
しかし、ピアンの将軍であった父は、数年前のある日突然、姿を

消した。誰にも、バートにも妻にも行き先を告げずに。
バートはサラの隣で乗用陸鳥（ヴェクタ）を走らせながら、少しだけ迷っていた。バートはひとりで危険地帯――サウスポートに向かうつもりだった。しかし、ピアン王女であるサラが自分を追いかけてきてしまった。バートとサラは幼なじみでタメ語で話せる仲だが、それでもサラはピアンの王女なのだ。このまま二人で危険地帯に向かって良いのだろうか。
しかし、サラの武道着姿は、これから向かう先が危険地帯であることを十分に承知している姿だった。例え得体の知れない敵が現われたとしても、バートと一緒に戦って倒して進んでいく、そういった決意の表れなのだろう。だからバートは、サラに対して何も言えなかった。
「……なあ。サラ」
バートはひとつ気になっていたことをサラに聞いてみることにした。
「なあに？　バート」
「……聞いたのか？　あの兵士に」
サラはしばらく口を閉ざした後、「ごめんなさい」とつぶやいた。
「なんで謝るんだよ」
バートとサラはしばらくの間、それ以上は言葉を交わさずヴェクタを進めた。
バートは自分が身につけている剣を確認した。バートの持つ剣はバートくらいの歳の少年が扱うには少々大きすぎる剣だった。しかし、バートは片手で軽々と振り回すことができる。剣は年代ものといった感じで良く手入れされ使い込まれていた。バートはこの剣を五年前の自分の誕生日に父クラヴィスから譲り受けた。十二歳のときだった。
バートは夏生まれの火属性で、火の精霊を自由に扱える――はずだった。しかしバートは昔からこの「精霊の扱い」が苦手だった。戦う力としては、父親譲りの剣技の腕前を持っていたので、特に精

霊を扱うための修業は積んでこなかったのだ。
「でも、バート。せっかくだから、『精霊』も使えたほうが、良い」
バートの父、クラヴィスはそう言った。そして『精霊剣』について教えてくれた。精霊を剣に宿らせる。すると、意識せずとも剣を振るえば精霊の力が発動するのだ。
バートはこの新しい力に夢中になった。毎日剣術と精霊剣の修業を欠かさなかった。父親も良く修業に付き合ってくれた。近所の友人と決闘の真似事なんかも良くした。
一年後。父クラヴィスは突然家を出たきり帰ってこなかった。ピアン王国随一の将軍であった父が。ピアン王宮は大騒ぎになった。捜索隊も結成されたりしたが、クラヴィスは二度と、ピアン王宮に、バートと母の待つ家には帰ってこなかった。

＊

そして今日の昼過ぎのことだった。突然、サウスポートの兵士がピアン王宮に駆け込んできた。兵士の話によると、今朝、サウスポートの町が正体不明の敵の襲撃を受けたのだという。サウスポートはピアン王国最南の町である。ピアンが接している他国はピアンの北に位置する山脈を挟んだキグリス王国だけだ。南の海にしか面していないサウスポートが「襲われる」なんて普通に考えてまずありえない話だった。
「正体不明……ってどういうことだ？」
バートはその兵士に尋ねてみた。
「バート様。やつら……、もしかしたら、いえきっと、『人間』ではないと思われます」
「何……だって」
「やつらは背中に赤い翼を生やしていて、自在に空を駆け巡ります。そして、どこからともなく突如出現し、大軍で港町を襲ったのです」
「赤い翼……」

「皆、彼らを『異世界から来た異形の者』と呼んでいます」
「……」
突然そんな話を聞かされて、バートは言葉を失った。人間ではない者。赤い翼を持つ異形の者。そんなやつらが、どこからともなく突如出現し、大軍で港町を襲った？
「……ひとつ聞いて良いか」
バートは混乱した頭を抱えながら、兵士に尋ねた。
「はい」
「『異形の者』ってのは、わかった。でもなんで『異世界から来た』んだ？　異世界って……」
「それは……、きっと」
バートの傍らで一緒に話を聞いていたピアン王女サラが口を開いた。
「二千年前の伝説に、なぞらえているのね？」
「そのとおりです」兵士はうなずいた。

＊

ここパファック大陸には、二千年前にもこの大陸で同じようなことが起きた、という言い伝えがあった。
二千年前。「異世界」からやってきた、赤い翼を持つ異形の者たちが、パファック大陸を襲撃した。大陸の者たちは苦戦を強いられたが、「四大精霊」の力を借りて、何とか彼らを大陸から追い出すことに成功した。しかし、大陸の者たちが失ったものはあまりにも大きかった――。という、伝説。
この伝説も、「四大精霊」についても、ちょっと前までは興味のある人は知っているくらいの単なる言い伝えに過ぎなかった。しかし、今のパファック大陸の状況は、二千年前の伝説と、あまりに酷似していた。

＊

「バート様。……ちょっと」
ひと通り話が終わったところで、兵士がバートを手招いた。バートはサラと顔を見合わせてから、うなずいて兵士に歩み寄った。
「何だ？　サラの前では言えないことか？」
「……はい。本当のことなら王女にも王にも報告するべきことなのでしょうけれど……、私たちまだ、確信が持てなくて」
「サラに関係することか？　それともピアン王に？」
「いえ。バート様に関係することです」
「俺に？」
兵士の口調、表情から、バートは何となくぴんときてしまった。
「……父親に関することか？」
「ご察しのとおりで」
「まさか、父親が見つかったとか言うのか？」
言いながら四年前の父親の顔を思い浮かべ、バートの声はわずかに震えてしまった。我ながら情けないと思う。
「私は見ていません。ですが、『見た』という噂を、聞きました」
「父親を……クラヴィスをか？」
兵士はうなずいた。
「どこで？」
「サウスポートです。クラヴィス将軍は……」
兵士は言い辛そうに、いったん言葉を切った。
「背に赤い翼を持ち、サウスポートの上空を飛び、他の異形の者たちと共に、サウスポート襲撃に加わっていたと――」
「な……」
バートは呻いた。それは、いったいどういうことなのか――。答えが浮かばない。
「それは、本当に父親なのか？」
兵士は首を振った。

「……わかりません。しかし……」
「……」
バートは唇を噛みしめて右の拳を握りしめた。四年前の父親の顔を思い浮かべる。今でもはっきりと思い浮かべることができる。
「……報告、ありがとう」
バートは短く呟くと、足早に歩き始めた。
「バート様、どちらへ？」
慌てたような兵士の声が背中から聞こえてきたが、バートは歩みを止めなかった。心臓が大きく音を立てている。
（行ってみるしか、ねーな）
サウスポートに行って、自分の目で確かめてみるしかない。バートはそう決めて、まっすぐに乗用陸鳥（ヴェクタ）乗場に向かった。今首都を発てば、暗くなる前にはサウスポートに着けるだろう。
それにサウスポートには知り合いが住んでいる。以前はピアン首都のバートの家の近所に住んでいたのだが、数年前、サウスポートに移り住んだ一家がいた。その一家とバートの一家は家族ぐるみでの付き合いがあった。サウスポートが襲撃されたというのなら、彼らの安否も気がかりだった。

（2）

「来た……か」
窓の外に目をやって、エニィルはつぶやいた。近所の者たちは皆逃げたと思う。エニィルと彼の妻、三人の子供たちは未だ、家の中から外の様子をうかがっていた。時折誰かの悲鳴が聞こえてくる。複数の足音も。ドン、という衝撃音も。
「いい加減、この家が燃える前に、何とかしなくちゃなあ」
エニィルは家の中を振り返った。彼の妻と三人の子供たちがじっとこちらを見つめていた。
『彼』が来たのは、あまりにも突然だった。彼が来たことを、エ

ニィルはすぐに感知した。ということは、彼にも自分の居場所、少なくともすぐ近く、ここサウスポートに自分がいることはわかっているはずなのだ。『彼』とエニィルは、初めて会ったときからそうだった。何故なのか、それが何を意味するのかは、少なくともエニィルにはわからないのだが。

（まさか彼らは、禁断のあの技術を……）

「お父さん！」

娘の鋭い声にエニィルははっと我に返った。

「そろそろ話してよ。私たちが、これから何をすれば良いのか。覚悟はできてるし、お父さんの言うことなら何だってするから」

ね、とエニィルの長女は弟二人に目をやった。二人とも真剣な眼差しで大きくうなずく。

「ありがとう」エニィルは言った。

「かなり、無理言うことになるけど、」

「全然オッケー」

エニィルの娘は不適に微笑（わら）った。

＊

リィルはエニィルの次男で、三人姉弟（きょうだい）の末っ子だった。年齢は十七歳で、バートと同い年。バートのことは小さい頃から良く知っていた。以前、ピアン首都に住んでいたとき、良く一緒に遊んだものだった。その後、リィルの家族はここサウスポートに移り住んだのだが、年に何度かは、首都のバートの家に遊びに行っているし、バートたちがこちらに遊びに来ることもあった。リィルの両親とバートの両親は、昔からの知り合いなのだそうだ。

リィルは姉エルザと一緒にサウスポートの街道を駆けていた。父と母と兄は一緒にはいない。街道脇の民家のほとんどは敵に破壊され半壊し、煙を上げているものもあった。道端には血まみれの小動物が横たわっていたりしたが、リィルは目をそらしながら姉の背を

追いかけて駆けていた。今は姉の他に人影は見えなかった。
「調子はどお？　万全？」
走りながら姉が声をかけてきた。姉は息ひとつ切らさないで駆けている。
「うん、わりと」リィルは答える。
「敵が現れたら頼りにしてっからね。任せたわよ」
「でも姉貴のほうが強いじゃん」
「あんたもそこそこでしょ」とエルザは言う。
「ピアンの将軍の息子と互角に渡り合えるんだから」
「……まーね」
リィルは水の精霊を扱うことが出来る。その攻撃力は大人をも凌ぐほどだった。首都にいた頃、バートとは良く「決闘ごっこ」をやっていた。どちらかが適当に「果たし状」を書いて相手の家に投げ込み、空き地で手合わせをおこなう。バートとの決闘の勝敗の結果は五分五分。最初はリィルのほうが強かった。昔のバートはいわゆる「精霊音痴」で、リィルが水の精霊を自在に操ることができる一方、バートは炎の精霊を召喚できたとしても一瞬で、ましてや思い通りに操ることなんて全くできなかった。
（それがいつの間にか「精霊剣」なんて器用なこと覚えちゃってさ）
親友が強くなることは嬉しいのだが、自分が負けることはちょっと悔しい。自分は負けず嫌いなのかもしれない。
空き地で決闘をしていると、時々見回りのピアン兵士たちに「何やってるんですかっ」と止めに入られた。「死んだらどうするんですかっ」と言われたこともあった。それほど凄まじい試合を繰り広げていたらしい……。そういえば決闘で大怪我して、もしくはバートに大怪我をさせて、姉エルザに本気で殴られたこともあった。

（3）

バートとサラはそれぞれの乗用陸鳥（ヴェクタ）で森の中を進んでいた。この

森を抜ければサウスポートはすぐそこだ。日が落ちるまでにはまだ少し時間がありそうで、暗くなる前にサウスポートに辿り着けそうだった。
森に入る前の街道や森の中で、バートとサラは何組かの集団とすれ違った。サウスポートを脱出してきた人たちで、ピアン首都に向かうところだと言っていた。バートは彼らにリィルの一家の行方について尋ねた。そして、父親――元ピアンの将軍、クラヴィスを見なかったかということも。
父親については何の手がかりも聞き出せなかったが、森の中で出会ったある女性はこんなことを言った。
「あなた達の友達かどうかはわからないけれど……、茶色の髪であなた達くらいの年齢の男の子なら、見たわ」
「どこでだ？　そいつは今、どこにいるかわかるか？」
バートは尋ねる。
「その子も私たちと一緒に首都に向かうところだったの」
女性はそこまで言うと、うつむいた。
「それで、この森に入ったところで、敵に見つかって……。そしたらその子がね、私たちに先に逃げろって行って、ひとりで――」
バートとサラは顔を見合わせた。
「ごめんなさいね……」女性は声を落とす。
「いや、教えてくれてありがとう。そいつが俺が探してるやつかどうかはわかんねーけど」
「あと、その子、こんなことも言ってたわ。『やつらの狙いは俺だから』って」
「……？」
バートとサラは再び顔を見合わせた。
女性に礼を言って、バートとサラは再び乗用陸鳥（ヴェクタ）を走らせた。
「心配ね……リィルちゃん」
サラがバートに話しかけてきた。
「もしその子がリィルちゃんだったとしたら――でも、敵に狙われ

ているって、どういうことなのかしら」
「さあ。何かやらかしたんじゃねーの、あいつ」
「……」
「俺はあんま心配はしてねーんだけどな、実は」
バートは言ってやった。サラがあまりにも心配そうな顔をしていたからだ。
「あいつがそう簡単にくたばるとは思えねーし」
サラはリィルのことを何故かちゃん付けで呼ぶ。バートとサラが幼なじみで、バートとリィルが親友同士だったので、バートとリィルとサラの三人で良く遊んだものだった。バートは最初、サラが大真面目に「リィルちゃん」と呼ぶのを聞くたびに吹き出していたものだったが、今ではもうすっかり慣れてしまった。リィルも普通にそれを受け入れているように見えたので、別に良いかと思っている。

＊

「痛いっ！　離してよ！　何てことするのよっ！」
エルザは叫んでいた。身体の後ろに回された両手首に縄が食い込んでひどく痛かった。
幸い、『敵』はそれ以上エルザに危害を加えるつもりは無いようだった。エルザは騒ぐのを止め、『敵』を睨み付け、ふうと息をついた。
「……あの子追ったって無駄よ」
エルザは言ってやった。
「何も持ってないし、何も知らないもの」
「貴女の、弟ですか？」
『敵』はやけに丁寧な口調で、エルザの理解できる言葉で話しかけてきた。『敵』は、背中に赤い翼を生やしている以外は『人間』に見えた。人間が着るような軍服を着込み、腰に剣を挿している。彼は赤い髪を背中まで真っ直ぐに伸ばし、エルザの父と同じように

眼鏡をかけていた。視力が弱いのだろうか。
　エルザを捕らえている『敵』は、ピアン王国で言うなら将軍、というよりは参謀に見えた。武術はあまり得意ではなさそうだった。
「そうよ。私の弟よ。私に似て可愛いでしょう。ちょっと生意気だけど」
「追いなさい」
　男は傍らに控えていた数人の『部下』たちにそう命じた。彼らは一斉に走り出した。
「……まっ、良いけどね。無駄なことを」
「さあ、どうだか」男は苦笑した。
「だって、長女でしっかり者の私ならともかくよ。お気楽のん気な末弟に大切なもの預けるように見える？　うちの父さん」
　くくっ、と男は笑い声をもらした。
「良く喋りますね。この状況で」
「……良いじゃない別に」
「面白い娘だ」
　男はエルザを見つめて眼鏡の奥で目を細めた。
「私の名はアビエス」
　と、男は名乗ってから、
「どうです？　私たちの仲間になりませんか？」
「……」
　エルザは少なからず驚いてアビエスを見返した。
「……それって。貴方たちに手を貸せってこと？」
「ええ」
「嫌だって言ったら？」
「貴女は死ぬことになります。今、この場で」
　アビエスは表情ひとつ変えずにそう言った。
　殺せるものなら殺してみれば？と言い返そうとしてエルザは言葉を止めた。そう言ってしまうのは簡単だ。でも――。
「……」

エルザは数秒間考えて答えを出した。そしてアビエスに告げた。

＊

森の中でリィルは木に片腕をついて呼吸を整えていた。激しい動悸が全身を駆け巡っている。呼吸は浅く早く、無意味に繰り返される。額や背中に冷たい汗をかいている。

（姉貴――）

街中で姉エルザは敵に捕らわれてしまった。リィルを逃がすために。リィルは逃げた。サウスポートを出て森を駆けた。追ってきた数人の敵兵は、『水の精霊』を召喚して倒した。

（姉貴……ごめん）

逃げなさい！という姉の声が耳に残っている。……助けられなかった。

「くそ……っ」

「部下たちは全員倒しましたか」

男の声にリィルははっと顔を上げた。赤い長い髪の男がゆっくりと歩み寄ってくるところだった。背中には赤い翼。――エルザを捕らえた男だ。後方には、さらに四名の敵兵を従えている。

「しかし、精霊の力の使いすぎで、だいぶ疲労しているようですね。もう余力は無いでしょう」

「……姉貴は……」

リィルの問いに男は答えず、眼鏡の奥でにやりと笑った。歩みは止めない。リィルは身構える。

「リィルちゃんっ！」

少女の悲鳴に似た声が後方から聞こえた。

「……？！」

リィルは思わず振り返った。二匹の乗用陸鳥（ヴェクタ）が見えた。黒髪の少年と、金髪の少女が乗っている。二人は同時に乗用陸鳥（ヴェクタ）から飛び降りてこちらに駆けてきた。

「バート……。サラ……」
リィルは二人の名を呟いた。
＊
（こいつらが……異形の……）
バートはリィルに近付いていた男をじっと見つめた。赤い髪。そして、背中には確かに、赤い翼。赤い翼以外は人間と言っても通用する風貌だった。
「大丈夫っリィルちゃん。怪我なんかしてない？」
サラがリィルに尋ねる。サラは大地の精霊を扱える。彼女の精霊は主に傷を癒すことに使役される。精霊には攻撃型、治癒型とタイプがあるとされていて、リィルの精霊タイプは典型的な攻撃型、サラの精霊タイプは治癒型だった。両方扱える者もいると聞く。
「ありがとうサラ。とりあえず怪我はしてないから大丈夫」
とリィルは言ったが、話すだけでも辛そうな感じだった。
「積もる話はあるけど、お前は少し下がって休んでろ」
バートはリィルに言って、リィルと男の間に割って入った。男は興味深そうにバートを見つめた。
「貴方は？」
「こいつの友人」バートは言う。
「そういうてめーは誰だ？」
「私はアビエス。ガルディアの将です」
「ガルディア……？」
「貴方たちがサウスポートを襲ったの？」
サラがバートの隣に並んで立って尋ねた。
「はい」
「……そうか」
バートは呟いて、剣を抜いた。アビエスは微笑んだ。
アビエスの後ろに控えていた敵兵たちが奇声を発しながら襲いか

かってきた。抜き身の剣を手にしている。赤い翼に、赤く短い頭髪。土色の肌。吊り上がった両眼。いびつな鼻。尖った耳。口から覗く牙。こいつらの容姿はあまり『人間』には見えない。
バートは斬りかかってくる剣をかわし、自らの剣を繰り出した。斬りつけられた敵が叫び声を上げて地面に倒れた。
「バートっ、危ない！」
別の角度から襲いかかってきた異形の敵に、サラが拳を振るった。四体の異形の敵が地面に倒れ動かなくなるまで、そう時間はかからなかった。
「ほう。貴方たちも強いですね。子供三人とはいえ、侮れない」
アビエスは感心したように目を細めた。
「俺は……」
バートはアビエスを見据えた。
「あんたに聞きたいことがある。俺の父親――クラヴィスのことだ」
「……クラヴィス、」
アビエスはその名を繰り返した。アビエスの表情はバートを見つめたまま、何も語らない。
「知ってるのか？」
「さあ」
「てめえっ！　真面目に答えやがれっ！」
バートは叫んで、アビエスに斬りかかった。アビエスはふわりと宙に舞い上がる。
「今は退きましょう。……また、会うことになるかもしれませんが。そう遠くないうちに」
「待て！　フザケるな！」
バートは見上げて叫んだ。アビエスは構わず、翼で飛んでサウスポートの方角へと去っていこうとする。バートはアビエスを追って駆け出そうとした。
「バートっ！」
リィルの叫び声が聞こえて、バートは足を止めて振り返った。

「追ったって……無駄だ……。もう、サウスポートは……完全に……やつらの、」
リィルは言って、言葉を詰まらせる。
「リィル……」
バートはリィルに歩み寄った。
「話すよ、色々なこと。……できれば座って話したいけど」
リィルは言った。

（4）

夜の闇の中を二匹の乗用陸鳥（ヴェクタ）が駆けていた。それぞれのヴェクタの前方に取り付けてある灯りが辛うじて狭い周囲を照らしている。雲が空を覆っているのだろうか。天は随分と暗い。
バートとサラとリィルはお互いの事情を語り合い、「とりあえず、ピアン首都に帰ろう」という結論に至った。あのままサウスポート周辺に留まっていたとしても、バートたち三人にできることは何もない。それに、もし王女に何かあったら……、というのが理由だった。サラはバートとリィルがピアン首都に帰るのなら自分も帰ることに異論はないと言い、リィルもサラのことを気にしてかすぐにでも帰るべきだと言った。バートは……、迷っていた。
バートが方位針（コンパス）を見ながら乗用陸鳥（ヴェクタ）の手綱を握り、リィルはバートと同じヴェクタに乗ってバートの後ろですやすやと寝息を立てていた。こいつの特技はいつでもどこでも寝られること。昼過ぎまで寝ていられること。とバートは思う。
「サラ。疲れてないか？」
バートは隣を走るヴェクタに声をかけた。
「大丈夫よ。休みなしで行けると思うわ」
サラの答えが返ってくる。
「疲れたら言えよ」
「ええ」

順調にヴェクタを走らせれば、首都に着くのは夜半過ぎくらいになるだろうか。バートはなるべくなら野宿はせずに首都についてから自分のベッドで眠りたかった。しかし……、自分のベッドに入ったところで、こんな気持ちを抱えたまま、眠りにつくことができるのだろうか。

＊

少し前まで、バートとリィルとサラは二匹の乗用陸鳥（ヴェクタ）をゆっくりと進めながら語り合っていた。

「エルザねーちゃんが捕まったあ？！」

バートは思わず声を上げていた。リィルの姉エルザは、何せバートとリィルの二人がかりでも敵わない相手なのだ。色々な意味で。

リィルはうなずき、黙り込んだ。サラが遠慮がちに尋ねる。

「それで、リィルちゃんのお父さまたちは……」

「……わからない。行方知れずってこと。姉貴と同じように敵に捕まったのかもしれないし、上手く逃げ延びているのかもしれない」

「そ……っか」

バートはリィルの父も母も兄も姉も良く知っていた。彼らの安否が全くわからないということは、リィルとは無事に再会できたものの、素直に喜べない。

「とりあえず、さ。首都に行ったら……」

「俺ん家に来いよ」

すぐにバートは言った。リィルはありがとう、と礼を言う。

「首都で、しばらく待ってみることにする。父さんも母さんも兄貴も、俺と同じこと考えると思うから」

「そうね。それが良いわ」

とサラも言う。

「大丈夫だって。お前の父ちゃんも母ちゃんも兄ちゃんも、絶対無事だって！」

バートは力強く言った。バートに背中を叩かれてリィルはようやく少し笑って、うなずいた。
「でも、どうしてリィルちゃんの一家が敵に狙われたのかしら？」
とサラ。
「んーー」
リィルは上を見上げて考え込んだ。
「実は、俺も良くわかってないんだ。俺末っ子だから、肝心なことは何ひとつ教えてもらってなくて」
「そうなのか……」
「うちに代々伝わる家宝かなんかあって、」とリィルは言う。
「それが敵さんに奪われると、すっごいやばいらしいんだ。『大陸全土の存亡に関わる』とか父さんが言ってた。それで本物の家宝と、ダミーの家宝を父さんと母さんと兄貴と姉貴が持って、みんなでバラバラに逃げたってわけ」
「ふうん。なんか大変なんだな……。お前の一家」
「リィルちゃんは持ってないの？　その家宝」
「俺は何も持ってない。俺の存在自体がダミーってことなんじゃないかな。……あっ、バートとサラだから話したけど、このこと誰にも内緒で」
「了解」
「ところで、どうしてバートはサウスポートへ？」
とリィルが尋ねてきた。
「そりゃもちろん、お前の一家のことが心配になって、」
「それだけ？」とリィル。
「さっき、バート、父親さんの名前を出してたけど……」
「……」
バートはため息をついた。サラにも知られていることだ。そのうち、ピアン王も知ることになるかもしれない。バートはリィルにも話すことにした。
「お前は見なかったか？　俺の父親」

バートは尋ねてみた。リィルは黙って首を振った。
「そうか」
「……」
そこで、会話は途切れた。三人はしばらくの間、無言で静かな闇の中を乗用陸鳥（ヴェクタ）に揺られて進んでいた。
バートは迷っていた。このまま首都に帰ってしまって良いのだろうか。さっきのアビエスとかいう赤い翼持つ者。あいつを追いかけて、父親のことを問い詰めたかった。でも、リィルは「無駄だ」と言った。サウスポートは、異形の者たちに完全に占拠されてしまったと。
（父親――。俺は……）
バートは唇を噛んで乗用陸鳥（ヴェクタ）の手綱を強く握り締めた。

旅の始まり

（1）

「本当に一人で大丈夫なんですか？」
と、リスティルが尋ねてくる。いつも通りの穏やかな口調で、キリアの心を確かめるように。
「うん、大丈夫よ、一人で」とキリアは答える。
「だからリスティルは、おじいちゃんのことお願い」
「わかりました」
髪の長い青年はしっかりとうなずいた。
キリアは一人「塔」を出て、国境の向こうの旅に出る。南の隣国のピアン首都までの旅は完全な一人旅となる。初めての一人での長旅。不安よりも、
（ずっと塔を出たいって思ってた）
キリアは乗用陸鳥（ヴェクタ）の背で大きく伸びをする。今回の旅はかなりの長旅になるだろう。空は青くて広い。キグリスの大草原を南に街道が延びている。振り返れば小さく遠ざかっていく塔が見える……。

（2）

バートの母はピアン首都で『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＯＡＳＩＳ（シャイニング・オアシス）』という名の小ぢんまりとした食堂を営んでいる。ここは昼間は食堂だが、夕方を過ぎると酒も飲めるようになる。二階には二人部屋が三つあり、宿泊もできる。交代制だが一応、入浴もできる。昼にランチを食べに来る人、夜に酒を飲みに来る人、そのまま入浴して泊まっていく人。客はそこそこ多く、特に昼時と夜は賑わっていた。
サウスポートを追われ、家族ともはぐれたリィルは、バートの家で住み込みで働くことになった。バートと母は「別に働かなくても」

と言ったのだが、リィルは住まわせてもらうからには働きますと言って譲らなかった。
「すみません、宿泊部屋ひとつ占領しちゃって」
「良いのよ。私とリィル君の仲でしょ。遠慮なんかしないで。それに昼時は忙しいから、正直、手伝ってもらえるのはすっごく助かるのよ。コイツは手伝いサボってばっかで何の役にも立ちゃあしないし」
バートの母ユーリアは息子を横目で見ながら言った。だってめんどくせーんだもん、とバートが良くわからない言い訳をする。
リィルがバートの家で寝泊りするようになってから数日後。一人の女性が『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＯＡＳＩＳ』を訪れた。開店直後で、客はまだ一人も居なかった。
「こんにちは」と言って、女性は食堂の扉を開けて中に入ってきた。
「いらっしゃい」
厨房で準備をしていたバートの母が明るく声をかけた。バートとリィルは慌てて水とおしぼりを持って出て行った。
女性はバートたちと同じくらいか少し上の年齢に見えた。ストレートの髪を肩まで伸ばしている。見慣れない顔だった。
「とりあえず空いている席へどうぞ」
リィルは笑顔で女性に言った。こいつ接客業に向いてるな、とバートは思った。バートは接客が下手で、母に「少しはリィル君を見習いなさい」とまで言われていた。
「あ、ごめんなさい。ええと、ちょっとお聞きしたいことがありまして」
女性は席に着くそぶりは見せずに言った。
「なんだ、客じゃねーのかよ」
バートは思わず声に出してしまった。むっとしたような女性と目が合う。まーまー、とリィルがバートをなだめた。
「よろしければ座ってお水でも。せっかく持ってきちゃったし」
「そうね。……ありがと」

女性は手近な椅子に腰かけると、リィルから水を受け取って微笑んだ。
「で、聞きたいことってのはね、」
水を一口飲んで、女性は口を開いた。
「私、人を探してるの。……『エニィル』っていう名の男性なんだけど」
「！」
バートとリィルはその名を聞いて目をみはった。エニィル――行方不明の、リィルの父の名だ。
「おいリィ……」
「『エニィル』さんを探して、ここに来たんですか？　何かあてでもあって？」
バートを制して、リィルが口を開いた。バートは会話はリィルに任せることにした。
「ん、」
女性は小さく頷いた。
「ピアン首都で色々聞いて回って。……あ、元々はサウスポートに住んでいたんでしょう。でも、サウスポートって、あんなことになっちゃったから」
「……」
「エニィルさんが来るとしたらここだって、噂で聞いてね。……その様子だと良く知ってるんでしょう、エニィルさんのこと」
「知ってますけど……」とリィル。
「貴女は、どなたなんですか？　何故彼を探しているんですか？」
「あ、申し遅れちゃったけど、」と女性は言った。
「私の名前はキリア。キグリスから来たの。エニィルさんを探しているのは、とあるお方の命を受けてね。決して怪しい者じゃないから」
「キグリス？！」
バートは声を上げた。キグリス王国は、ピアン首都の北の山を越

えたところ、大陸の中央に位置する王国で、ピアン王国とはあまり仲が良くなかった。数年前、国境付近で小競り合いをやらかしたこともある。
「キグリスで悪い？」
女性――キリアは強気に言い返してきた。
「今、ピアンだキグリスだって言ってる場合じゃないでしょ。そのこと一番良くわかってるの、ピアンの人たちなんじゃない？」
「まーまーまー」
リィルがバートとキリアの間に割って入ってきた。そしてキリアを見て言う。
「エニィルは俺の父です。――さっき、『とあるお方の命（めい）』って言いましたね？」
「ああ……貴方、息子さんだったのね」
「『とあるお方』って誰ですか？　父さんの知り合い？」
「……それは……、ええと……」
キリアは口ごもった。
「お互い隠し事は止めませんか？　あ、場所変えて話そうか」
「そうね。それが良いわね」
いつの間にかバートの母が背後に立っていた。
「二階に行ってきたら？　あとで差し入れ持って行ってあげるわよ」
「すみません、ユーリアさん。行こう、バートも」
リィルはバートとキリアをうながして、二階へと向かった。

＊

三人は階段を上り、二階の宿泊部屋のひとつに入って、扉を閉めた。部屋の中にはベッドが二つあり、間に小さな机が置いてある。バートとリィルが片側のベッドに腰かけ、キリアはもうひとつのベッドに腰かけて机を挟んで二人と向かい合った。
「どっちから話すべきかなー」

と、リィルは口を開いた。
「貴女が俺の父さんのことをどこまで知っているかによるんだけど、父さんの知り合い？」
「キリアで良いわよ。私はごめん、知らないの。でもおじいちゃんは良く知っているみたいだった」
「おじいちゃん？」
「キグリスの大賢者、キルディアスが私の祖父なの。……ピアンの人なら知らないか」
「キグリスの大賢者……」
バートはつぶやいて、正直に知らない、と答えた。
「俺は、噂程度には」とリィル。
「おじいちゃん――大賢者キルディアスに頼まれて、ここに来たってわけ」
とキリアは言う。
「エニィルさんの安否と所在を確かめてきて欲しいって。私が塔を出たときには、もうサウスポートの噂はキグリスまで届いていたんだけど……」
「父さんの行方は……わからないんだ」
とリィルは言った。リィルは自分の家族がバラバラになったこと、姉が敵に捕まったこと、もしかしたら家族に会えるかも知れないと思ってここにいるが、未だ誰にも会えないことをキリアに伝えた。
「そう……」キリアは残念そうに言った。
「貴方も、大変ね……」
バートの母ユーリアが三人分の飲み物と焼き菓子を持って部屋に入ってきた。三人は焼き菓子を食べ、飲み物を飲んで、ふうと一息ついた。
「さーてーと。どうしよっかな」
と言いながら、キリアは立ち上がった。
「お仕事中、突然ごめんね。私そろそろ行かなくちゃ」
「どうすんだお前、これから」バートは尋ねてみる。

「エニィルさんの件は、正直、どうしようかなってところ」とキリア。
「まあ、所在不明ならそう報告するしかないんだけどね。数日経ったらまたお邪魔させてもらうかも」
「そっか」
「……それと。私が首都に来たの、もうひとつ理由があるのよ」
そう言ってキリアは、何故かはあ、とため息をつく。
「？」
「ううん、なんでもない。時間があれば食堂でお昼食べて行きたいところなんだけど、ごめん、もう行かなくちゃ」
「気にしないで良いよ。また食べに来てくれれば」とリィル。
「ありがとう。お父さん、見つかると良いわね」
キリアは言った。
「私も『命』のこともあるし、こっちはこっちでエニィルさん探すから。何か情報あったら伝えるわね」
「それはすごく助かるよ」
リィルは礼を言った。

（3）

その日の夜。バートは自分の部屋の灯りを消してベッドに入った。バートの部屋は二階の一角にある。元々は宿泊部屋だったらしいが、ここはいつの間にかバートの部屋ということになっていた。つくりは二人用の宿泊部屋と同じだが、ベッドは一つしかなく、もう一つのベッドの代わりに大きめのテーブルが置いてある。ちなみに、バートの父母の寝室は一階にある。
コンコン。最初は空耳かと思った。少し後、再びはっきりと窓をノックする音が聞こえた。バートは起き上がって灯りをつけ、窓の外を見てぎょっとした。
「な、なんでお前、こんな時間に……」

バートは慌てて窓を開けた。そこには金髪の少女、ピアン王国王女サラが「やっほー」と笑顔で手を振っていた。
バートが開けた窓から、サラはお邪魔します、とつぶやいて部屋の中に入ってきた。ここは二階である……。バートはため息をついた。どうやって上ってきたんだ、とは聞かない。バートの部屋の窓の外はベランダになっていて、そこから屋根、塀とつたって通りに下りられるのだ。運動神経の良い者なら、その逆もわけなくできる。サラは小さい頃から良く王宮を抜け出してはバートの部屋に侵入してきたので、そのことに関してはバートは驚かなくなっていた。
「どうしたんだよサラ、こんな夜中に」
午前中は突然変なキグリス女が来たし、今日は千客万来だな、とバートは思う。
「ねえバート」サラはバートを見て言った。
「伝説の大精霊……”炎（ホノオ）”に会いに行かない？」
「……はああ？」
バートはその場でこけそうになった。真夜中に一国の王女が民家に乗り込んで来て何を言い出すのかと思えば……。

＊

この世界には「精霊」が存在する。自然界に存在する不思議な「気」のことである。精霊には土・火・風・水の四種類がある。人（ヒト）は個人差はあれど、これらの精霊を自由に操ることができる。精霊の力は物を破壊する力にもなり、傷を癒す力にもなる。
ただし、人（ヒト）が操れる精霊は四種類のうち一種類のみである。火に属する者は火の精霊、水に属する者は水の精霊を扱える。その属性は、その者が生まれた季節によって決まっていた。
そして、精霊たちを統べる「大精霊」の存在が、古くから信じられていた。火の精霊たちを統べるのは、大精霊”炎（ホノオ）”。水の精霊たちを統べるのは、大精霊”流水（ルスイ）”。風の精霊たちを統べるのは、大

精霊”風雅(フウガ)”。土の精霊たちを統べるのは、大精霊”陸土(リクト)”。四体の大精霊は、普段は人知れずどこかでひっそりと眠りについている、と言われている。そして、二千年前、この大陸が危機に陥ったときには、人間たちに力を貸し与えた。そして今は再び長い眠りについている――。

「……で。”炎(ホノオ)”ってのは一体どこにいるんだ」

バートは一応聞いてみた。

「知らないのバート。有名な伝説じゃない。ピアンとキグリスの国境、ピラキア山脈よ」

「へえ。そんな伝説があったのか。てか、国境っつったら随分遠いな」

国境に辿り着くまでには、首都を出てから乗用陸鳥(ヴェクタ)を走らせて数日はかかる。

「詳しい話は行きながらにしましょ」とサラは言った。

「さあ、早く準備すませちゃってね」

「……っおいっ！」バートは思わず大声を上げた。

「まさかお前、今から行く気満々なのか？」

「もちろんよ」サラは笑顔で答える。

「オイ、いくらなんでも冗談、」

「本当のこと言うとね……」

サラは急に声のトーンを落とした。

「……あたし、命を狙われてるの」

「な、何っ？！」

バートは声をひそめて驚いた。

「どういうことなんだよサラ……！」

「だから、王宮を抜け出してここまで逃げてきて……できるだけ早く、遠くに逃げなくちゃならないの。お願いバート。あたしもう頼れるのが、バートしかいなくて」

「何てこった……」バートはうめいた。

「そうならそうと早く言えってんだ！　待ってろっ、今から準備す

っから……」
「ごめんね……巻き込んじゃって」
「何を今更」
バートは短く言い捨てると、慌てて外に出る支度を始めた。突然のことだが、もしかしたら数日かかる旅になるかもしれないので、それなりの準備をしなければならない。
「そうだ、リィルも連れてくか」
バートはふと思いついて言った。リィルはバートの隣の部屋でぐっすり眠っているはずだ。
「そうね、リィルちゃんもいてくれたほうが心強いわ」
「いざって時のために、人数は多いほうが良いよな」
と言いながら、バートは廊下に出てリィルの部屋の扉を開け放つ。
「おいリィル――」
ぐっすりと眠るリィルを叩き起こそうとして――バートは止めた。リィルがここに居るのは、リィルの父母や兄がここに来るからかもしれなくて、それをリィルは待っているのではなかったか。わざわざ、王女の命を狙う者から逃げるという、危険な逃避行の旅にリィルを連れ出す必要はない。
「サラ、やっぱりリィルは寝かしておくことにした」
部屋に戻ってバートはサラに言った。
「あいつ、夜だめなんだよな。起こしても起きねーし。はっきり言って足手まといになるだけだし」
「そうなの……。残念ね」
「俺たちが急にいなくなって心配するといけねーから、書き置きだけ残しておくか」
バートの母ならいくらでも心配させておけば良いが、リィルについてはそうもいかない。バートは戸棚をあさってペンとメモ用紙を取り出すと、短い伝言を書いて、そのへんの封筒に入れた。封筒の表には「果たし状」と書かれていたが気にしている時間はない。バートはその封筒をリィルの部屋に投げ込んだ。

（4）

扉を叩く音がする――。リィルははっと目を開けた。窓から差し込む光で部屋の中は明るかった。太陽がいつもより高い位置にあるような気がする。

「リィル君、起きてる？　いーい？　入るわよ」

バートの母ユーリアの声が聞こえてきた。はいー、と返事をして、ふとベッドの脇に落ちている封筒が目に留まった。

扉が開けられてユーリアが入ってきた。

「うちのバカ息子知らない？」とユーリアが尋ねてきた。

「いつまでたっても起きてこないから、どうしたのかと思ってアイツの部屋覗いてみたらいなくって」

「そういえば、今日は起こされなかったな……バートに」

リィルはここ数日ひとりで起きたためしがなかったな、と思い返していた。寝起きの悪いリィルを叩き起こすのはバートの役目だった。

「ええと、バートがいないんですか？」

大あくびをしながら、リィルは床に落ちていた封筒を拾い上げた。

「果たし状」の文字が目に飛び込んできてぎょっとした。

「？？」

リィルは首を傾げながら封を開けた。

『リィルへ　サラが命を狙われているらしい。二人でできるだけ遠くに逃げることにした。ついでに大精霊”炎（ホノオ）”にも会ってくる。バート』

＊

リィルとユーリアは、一階の食堂で少し遅めの朝食をとっていた。

「じゃあ……、サラちゃんが命を狙われてて、うちのバカと二人で

逃亡中、ってことなの？」
と、ユーリア。
「どうやらそうみたいで……」
リィルはコーヒーを口にしながら答えた。
「心配だわ……サラちゃんが」
「……バートの心配はしないんですか」
「それにしても、『ついでに』以下の意味が良くわかんないわね。大精霊……”炎（ホノオ）”？」
ユーリアが書き置きを手に首を傾げた。
「”炎（ホノオ）”ってピラキア山脈でしたっけ。国境付近まで逃げるつもりだって意味なのかなあ」
「随分遠くじゃない。いつ帰ってくるつもりなのかしら。……当分帰ってこないつもりなのかしら」
「いつまでも二人で逃げ続けるわけには……。ってか、サラが狙われてるってどういうことなんだろう。それが解決すれば、帰って来るのでは」
「そうね。久しぶりに王宮行ってみようかしら。この書き置きだけじゃあねえ。何が起こってるのか、確認してこないと」
そうですね、とリィルがうなずいたとき、がたん、と音を立てて扉が開けられた。まだ開店時刻ではなく、扉には「準備中」の札がかかっているはずだった。扉の鍵は開いていたらしい。
「キリア？」
駆け込んできた女性を見てリィルは声を上げた。昨日もここに来ていたキリアだった。
「すみませんっ、ちょっと……」
キリアはずっと走ってきたらしく、息を切らせていた。ユーリアが水の入ったコップを持ってきてキリアに渡した。
「……聞きたいことが。サラ王女、ここに来てませんか……？」
「え……」
とだけつぶやいて、リィルは固まってしまった。

「他言無用の極秘情報なんだけど……サラ王女が……昨夜から行方不明で……」
「……？」
何故キリアがサラのことを知っているのだろう……。キリアは何者なのだろう、とリィルは考える。そういえばキリアは最初から色々あやしかった。まさかキリアが王女の命を狙う暗殺者……？とまでリィルが思ったとき、
「どうしよう……やっぱり悪いことしちゃった……。王女がいなくなっちゃったの、きっと、私の所為……」
キリアは言って、コップに口をつけるとうつむいてしまった。その姿は本気で落ち込んでいるようで、とてもキリアがサラの命を狙っている暗殺者のようには見えなかった。というか、そう信じたい。
「あのー、詳しい話、聞かせてもらえませんか？」
リィルはキリアに言った。今日はしばらく臨時休業ね、と言って、ユーリアは扉の鍵をかけるために立ち上がった。

＊

「私が首都に来たの、もうひとつ理由があるって言ったでしょ」
と、キリアは語り始めた。キリアは二つの命を受けてピアン首都に来たのだという。
「ひとつがエニィルさんのこと。これは昨日話した通りね。で、もうひとつが、ピアン王女のことなの。こっちはキグリス王の命でもあるの」
「ふうん。俺の父さんのことより、そっちの方が重要そうだね」
「まあね」キリアはうなずいた。
「キグリス王は、ピアンとの停戦を考えているの」
「へえ、ピアンとキグリスが停戦……、それ、良いね」
「うん。お互いにとって悪い話じゃないでしょ。だって、ねえ」
ピアン王国最南の港町が、『異世界から来た異形の者』たちに占

拠されたという情報はキグリスにも伝わっていた。キグリス側でも、その出来事を二千年前の伝説になぞらえる者が多くいるという。
　ピアンとしては、既にキグリスと小競り合いを続けている場合ではなくなっている。キグリスとしても、その敵の正体がわからない以上、大陸全土の脅威ともなり得る「彼ら」を撃破するため、ピアンと手を組んだほうが得策、というわけなのである。
「それで、キグリス王は、停戦の証（あかし）として、キグリス王子ロレーヌと、ピアン王女サラ様を婚姻させようとしているわけ」
「それって……」
「そう。政略結婚、てやつね」とキリアは言った。
「その話を持ってきたのよ。……あんま気は進まなかったけど。あ、停戦同盟じゃなくて、政略結婚のほうね」
「うーん確かに、結婚ってのはねえ。一生のことだもの……」
　ユーリアがつぶやく。
「……変なこと聞くけど、」リィルはキリアに言った。
「その話、本当のことだよね？」
「嘘言ってどうするのよ……。王宮行って確かめてきたら？　あ、今のところ王女失踪の件は極秘情報ってことになってるけど……」
　キリアはユーリアを見た。
「ごめんなさい、色々調べさせてもらっているんです。『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＯＡＳＩＳ』の女将（おかみ）さんが、ピアンの将、クラヴィスさんの妻だってことも。なので、貴女だったら、きっと王宮で色々教えて貰えると思います」
「ユーリアさん」
「……そうね。私行ってくる」
　ユーリアはそう言って立ち上がった。
「王宮には行こうと思っていたところだったのよ。リィル君、留守番よろしくね」
「はい」リィルはうなずいた。
　キリアは色々しっかりしていそうだ、とリィルは思った。今の話

が本当か嘘かどうかはバートの母が王宮に行けばわかることだ。問題は……『サラが命を狙われている』というバートからの伝言。これは、今回の政略結婚絡みのことなのだろうか。……それとも。
「そういえば」とキリアがリィルに尋ねてきた。
「昨日一緒にいた……バートだっけ。彼は今日はいないの？　彼、クラヴィス将軍の息子さん、よね？」
「そうだけど。……ごめん突然話変わるけどキリア、サラはなんでいなくなっちゃったんだと思う？」
「そりゃあ……、私が持ってきたキグリス王子との政略結婚が嫌で……じゃないの？」
「これ、」
リィルはキリアにバートからの伝言を見せた。
「……どう、思う？」
「……」
キリアはメモ用紙に書かれたバートの文字を凝視していた。
「ピアン王女が……命を狙われて……？　それは私、初耳ね」
「そうかー。まあ、この件についてもバートの母親さんが情報集めてきてくれると思うからそれを待つとして……」
「……なんで『ついでに大精霊”炎（ホノオ）”』なのかしら。ここは突っ込むところで良いの？」
「たぶん」リィルは答えた。

＊

しばらくして、バートの母ユーリアが『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＯＡＳＩＳ』に帰ってきた。
「やっぱりサラちゃんが行方不明になっちゃってるってのは本当ね……みんな必死で街中探し回ってるわ」
とユーリアは言った。
「ユーリアさん、サラが命を狙われて……って件は？」

リィルは尋ねてみる。
「そういう話は聞かなかったわね」
「そうですか……」
リィルは重い口を開いた。
「……まさかとは、思いますけど」
「王女が首都から逃げ出すための口実だったりして……？」
と、キリアが続ける。
「断言はできないけどね」
「うう、もしそうだったとしたら……そこまでピアン王女追い詰めちゃったのね……私」
キリアはそう言って、がっくりと落ち込んだ。
「それでもし本当に王女に何かあったら……キグリスとピアンの国交回復は絶望的……おじいちゃんにもキグリス王にも怒られる……どんな顔してキグリスに帰れってのよ……」
「キリア、」リィルはキリアに声をかけた。
「サラ王女が、無事にピアンに戻れば良いんだよね？」
キリアはリィルを見てうなずく。
「俺、二人を探しに行きます」
と、リィルは言った。
「二人のこと心配だし、探しに行って、連れ戻してきます」
「でもリィル君、貴方ここで……」
とユーリアが言いかけると、
「良いんです。何となくですけど……俺の家族は、ここで待ってるだけじゃあ、会えないような気がするんです」
「……そう」
「私も一緒に行きます」とキリアも言った。
「どうせこのままじゃあキグリスには帰れないし」
「わかったわ。くれぐれも気をつけてね」とユーリアは言った。
「……まあリィル君たちなら、うちのバカ息子と違ってしっかりしてそうだから安心ね」

「ありがとうございます。……すぐに見つかると良いですけど」
「幸い、あてはあるからね」
キリアが言い、リィルはうなずいた。
「夜のうちに首都を出たってことよね……。半日弱遅れか。追いつくかな？」
「バートたちが『リンツ』で一晩宿泊……ってことになったら、希望はあるかな。その分こっちは強行軍になるけど」
「とにかく、私たちもすぐに出発しないとね」
とキリアは言った。

ひとつめの旅が、始まろうとしていた。

邂逅

（1）

夜明け前。バートは時折背後を気にしながら二人乗りの乗用陸鳥（ヴェクタ）を走らせていた。目指すは首都の北に位置するリンツという町だった。リンツはピアン王国で二番目に大きい町である。この乗用陸鳥（ヴェクタ）だと、リンツに着くまでには丸一日弱かかる。真夜中に首都を出てきたバートたちがリンツに着くのは、やはり夜頃になるだろう。

「今のところ、追っ手は追いついてきてねーみたいだな」

バートはサラに言った。

「そうね」とサラ。

「追っ手は上手くまけたんじゃないかしら。もう大丈夫かも」

「でも、まだ気は抜けねーな。リンツまでは休みなしで飛ばすぞ」

「良いわよ。リンツに着いたらゆっくりどこかの温泉宿にでも泊まりましょう」

うきうきとサラは言った。

「……お前、わりとのん気だな。自分の命が狙われてるってのに」

バートは呆れる。

「だって、ずっと気ぃ張っててもも疲れるじゃない」

地平線から、ゆっくりと太陽が姿を現し始めた。草原の真ん中を北へ延びる街道が少しずつはっきりと照らし出されていく。

「ねえバート。せっかく遠出するんだから、大精霊”炎（ホノオ）”には会っていきましょうね」

朝日に照らされた王女の横顔は輝いていた。

「……そっちが目的かよ、もしかして」

「細かいことは良いじゃない」

ピアン王国とキグリス王国の国境であるピラキア山脈には、「開かずの扉」と、大精霊”炎（ホノオ）”の伝説がある。岩肌にはめ込まれた、

誰にも開けられない「扉」。その奥で大精霊”炎(ホノオ)”が眠っているという伝説――と、サラは語る。バートもサラも、その場に行くのは初めてだった。
「でも、『開かずの扉』って。誰にも開けられないって。それじゃあ大精霊”炎(ホノオ)”には会えねーってことじゃねーか」
「うーん。そうねえ……」とサラ。
「でも、例えそうだったとしても、良いのよ。伝説の、その場に行くってのが大切なんだから」
「ふーん……」
バートは気のない返事をする。とりあえず目指すはリンツの町だ。

＊

リィルとキリアも、二人乗りの乗用陸鳥(ヴェクタ)を北に向けて走らせていた。バートのメモには大精霊”炎(ホノオ)”と書いてあった。大精霊”炎(ホノオ)”といえば、国境のピラキア山脈。バートとサラがそこに向かっているとしたら、北のリンツという町に立ち寄るはず。バートたちがリンツに着くのはおそらく夜で、バートたちはリンツに一泊するだろう。リィルたちがリンツに着くのは、休みなしでヴェクタを走らせて多分朝になる。そこで追いつける、というのがリィルとキリアの読みだった。
リィルとキリアは運転を代わりながら北を目指した。真上にあった太陽がゆっくりと高度を下げ、あたりがだんだん薄暗くなり、そして街道が完全な闇に包まれ……、前方に、小さな木造の建物が見えてきた。「道の駅」と呼ばれる休憩所で、旅人たちが仮眠をとることができる場所だ。近くに水場もある。ここがちょうど首都とリンツの中間地点になっている。
「良いタイミングで『道の駅』……って言いたいところだけど、ここで泊まっちゃったらリンツで王女たちに追いつけなくなっちゃうわよね。でも、疲れてたら休憩にする？」

手綱を握っていたキリアは乗用陸鳥（ヴェクタ）の速度を落としながらリィルに話しかけた。しかし、返事は返ってこない。代わりに規則正しい寝息が聞こえてくる……。

「……」

そろそろ運転交代の頃合なんだけどなー、と思いながら、キリアはため息をついてそのまま乗用陸鳥（ヴェクタ）を走らせた。

（2）

バートとサラは日が沈んでだいぶ経ってからリンツに到着した。さすがに疲れていたし、お腹もすいていたので、すぐに泊まるための宿を探すことにした。リンツには大小さまざまな宿が何軒もあり、ここでは温泉も湧くので温泉付きの宿もある。町の入口の案内所で「リンツ温泉宿マップ」をざっと眺めたサラが、「ここが良いわ」と主張した温泉宿があった。町の入口に乗用陸鳥（ヴェクタ）を停め、バートとサラは歩いてそこへ向かった。

『隠れ家』という名のその温泉宿は、人通りの少ない町の外れにぽつんと建っていた。木造二階建てで、中に入ると懐かしいような木の香りがした。「おやおや、良く来たねえ」と、奥からのんびり喋る老婆が出てきてにこにこと宿帳を二人の目の前に広げた。

「ね、思ったとおりだわ」サラはバートに微笑んだ。

「良いところでしょう」

「そうだな」

素直にバートはうなずいた。建物は古いが、とても感じの良い温泉宿だった。

バートとサラは宿帳に偽名を記帳すると、老婆に二人部屋に案内してもらい、夕食が必要か聞かれた。老婆が夕食を用意している間に、それぞれ温泉に浸かり旅の疲れを癒した。なめらかで良いお湯だった。

＊

翌朝。鳥の鳴き声に起こされてバートが目覚めると向かいのベッドは空(から)だった。慌てて飛び起きると、机の上の書き置きが目に入った。サラからの伝言で、ここの温泉気に入ったから朝風呂入ってくるわね、といった内容だった。バートはほっと息をついた。

（これでもしサラに何かあったら、何のための護衛だってんだ）

でも、確かに良い湯だったよな、とバートは昨日浸かった温泉を思い出す。源泉かけ流しの温泉で、湯は常に浴槽から大量にあふれ出ていた。色は茶色で、少々ぬめっていて……そして、翌朝には昨日の旅の疲れがすっかりとれていた。

コンコン、と扉を叩く音がした。サラが戻ってきたと思って返事をすると、

「大当たりー」

「良かった……！　計算どおりね」

と言いながら、バートの知り合い二人がずかずかと部屋の中に入ってきた。

「げっ、リィル！」バートは叫んだ。

「それと、お前確か……」

「キリアよ。覚えててくれたのね」

キリアはバートを見て言った。

「な、何なんだよお前ら……。何で来たんだよ」

「なんでって……」

リィルは部屋の中を眺め回しながらバートに尋ねた。

「ところで、サラは？　相部屋だよね？」

「サラなら朝風呂行ってるけど……、つーか、なんで俺たちがここに泊まってることがバレたんだ！」

「いやー、だってさあ」リィルは意味ありげに微笑んだ。

「付き合い長いからさ、バートとサラがどの温泉宿を選ぶかってのは、わかっちゃうわけ」

「大当たりだったわね。さっすがリィル」
と言いながら、キリアはサラが寝ていたベッドに寝転んでいた。
「それにあの宿帳。『ユーリア』と『カシス』って」
「だってサラが俺の母親の名前書くから……！」
『カシス』というのはサラの父、すなわちピアン国王の名前だった。
「キリア、疲れた？」
ベッドに寝転んで目を閉じてしまったキリアにリィルが声をかけた。
「当たり前でしょ！」キリアは目を閉じたまま叫んだ。
「夜中運転させられてたの、誰だと思ってるの！」
「あはは……ごめん」
「おめーらもしかして、完徹で俺たちのこと追いかけてきたのか？」
バートは呆れた。
「だって、夜中走らなきゃ追いつけない計算で……」
「完徹したのは私だけよ！」キリアが不機嫌に叫んだ。
「だからごめんって。でも、追いつけて良かった」
「ご苦労だったなー。でも、なんでそこまでして追いかけてきたんだよ」
とバートが言ったとき、廊下から少女の楽しそうな鼻歌と軽やかな足音が聞こえてきた。バートとリィルははっとして顔を見合わせた。
そして扉が開けられる。
「たっだいまバー……」
そこまで言ってバートたちの前に姿を現したサラはその場に固まった。バートと、リィルと、反射的に起き上がっていたキリアを見て。手にしていた手提げ袋が音を立てて床に落ちる。
「サラ王女っ！」キリアは叫ぶ。
「貴女はっ……キグリスの！」サラも叫ぶ。
サラの反応を見てバートははっとした。

「まさかお前……！　お前がサラの命を狙う暗殺者だったとは……！」
「違うわよっ！」

＊

「……つまり、」
ひと通りキリアとサラの話を聞いたバートの表情は険(けわ)しかった。
「……狙われてるってのは。急いで首都を出るための、口実だったんだな、サラ」
「ごめんなさいっ」
サラはすぐに言った。バートは右手を振り上げたがその手をリィルにつかまれた。
「何もぶつことないだろっ」
「けどっ、こいつ……！」
バートはサラをにらんだ。
「心配かけさせやがって……みんなにも迷惑かけて……！」
「ごめんなさい」
「お願い、王女を責めないで」
と言ったのはキリアだった。
「私、気持ちはわかるから……」
「キリア……」
サラは意外そうにキリアを見た。
「私だったら絶対嫌だもん。政治の道具にされて、見ず知らずの隣国の王子と結婚して一生過ごさなきゃならないなんて」
キリアは主張した。それを聞いて、サラは目を輝かせてがしっとキリアの両手を握り締めた。
「ふーん、そういうもんなのか？」
「「そうよっ！」」
バートの何気ない疑問の声に、女性二人が声を揃えた。

「でも、まあ、良かったじゃん」とリィルが言う。
「サラの命が狙われてなくて。実際会って確かめてみるまで、俺たちもそれが気がかりだったからさ」
「そうだな」バートはうなずいた。
「そうとわかれば、さっさと首都に帰るぞ、サラ」
「嫌」サラは即答した。
「おい」
「だって帰ったら……あたし、キグリスの王子と結婚させられちゃうじゃない」
「そんなに嫌ならことわりゃいーじゃん」
「……ことわれないでしょ」
とサラは言った。
「だから……王宮、抜け出してきたんじゃない……」
「……」
サラの表情は真剣だった。バートは言葉に詰まった。
「……お願い、バート」
サラはバートを見つめて言った。
「もう少し……、もう少し、旅しましょうよ。ね、せっかくここまで来たんだから。首都には……いつでも帰れるんだから」
「サラ……」
「バートだって会いたいでしょ？　大精霊”炎（ホノオ）”」
「それは俺は別に」
「あ、私は会いたいな」
キリアが身を乗り出してきた。
「ピアンに来るときは直行しちゃって、寄り道できなかったのよね。やっぱり今のこのご時世、大精霊の一人や二人、会っておかないとね」
「ありがとう！」サラは顔を輝かせた。
「じゃあ、決まりね」
「おい、何が決まったんだ」

「バート」リィルがバートを突っついた。
「良いじゃん、かたいこと言わずにさ。とりあえず四人で、その大精霊”炎(ホノオ)”っての、見に行こうよ」
「お前も乗り気なのかよっ」
バートはため息をついた。三対一、勝負は決まってしまった。サラは喜び、キリアも何だかうきうきしている。……サラはともかく、キリアの浮かれようは、なんだか不思議だった。

（3）

夜中乗用陸鳥(よるじゅうヴェクタ)を運転していたキリアはぐったりと疲れ果てていたので、四人で『隠れ家』にもう一泊してから出発することにした。キリアはバートが使っていたベッドに潜り込むとバートを部屋から追い出した。リィルが隣の二人部屋を男部屋として確保してきてくれたので、バートは荷物を持ってそちらに移った。

＊

夕方、キリアが目覚めるとサラが向かいのベッドに寝転んで分厚い本を広げて熱心に読んでいるところだった。キリアは上半身を起こすと大きく伸びをした。
「あ、キリア。起きたのね」
気付いてサラが声をかけてきた。
「おはよう。……あいつらは？」キリアは尋ねる。
「暇だから町ぶらついてくるって言ってたわ」
「貴女は行かなかったの？」
「あたしは一応お忍びだからあまり出歩かないほうが良いって、リィルちゃんが」
「そっか。姫様は姫様だもんね……」
サラと会話しながら、キリアは別のことでほっとしていた。バー

トもリィルもピアンの王女も、ちゃんと自分が目覚めるまで待っていてくれたのだ。キリアは実は、眠りにつく直前、「目が覚めたら誰もいなかったりして」ということをうっすらと考えていた。バートとリィルとサラは幼なじみで仲の良い感じだったが、キリアだけは国籍も違う余所(よそ)者だった。彼らにとっては、自分は先日初めて出会ったばかりの得体の知れない者で。そんな自分を、彼らは受け入れ『旅』に同行させてくれるのだろうか。そういった漠然とした不安があった。しかし、王女が見つかり気のゆるんだキリアに眠気は容赦なく襲いかかってきた。

（置いていかれるなら置いていかれるで……良いわよ、別に。ひとりは慣れてるし）

キリアはそんなことを思いながら、眠りについたのだった。

「サラ、で良いわよ。呼び捨てで」

突然サラが言ってきた。

「え」

「バートもリィルちゃんもそう呼んでるもの」

「……そう。それは、ありがと……」

キリアはとりあえず礼を言った。そういえば自分はいつの間にか年下の王女に呼び捨てにされてるなと思ったが、別に嫌な気持ちはしなかった。

＊

『隠れ家』で四人で夕食をとり、温泉に浸かり、ぐっすりと眠り、次の日の朝、四人はリンツを発ち北を目指すことにした。二人乗りの乗用陸鳥(ヴェクタ)二匹にバートとリィル、キリアとサラに分かれて乗った。

リンツの町の出口、ヴェクタ乗場に向かう途中、キリアはある建物の前ではっとして足を止めてしまった。聞き覚えのある名称の看板の、古びた小さな建物だった。

「どうしたの、キリア？」

先を行くサラが振り返ってキリアに尋ねてきた。
「ううん、何でもない」
と言って、キリアは何事もなかったかのように歩き出した。
（そっか……。アイツ、出身はピアンのリンツだったんだっけ）
昔のほろ苦い思い出を思い出しかけて、キリアは首を振って思い出を振り払った。
リンツを朝に出て、順調に街道を進めば夕方にはピラキア山脈の麓（ふもと）に辿り着く。麓には「道の駅」の小屋があるのでそこで一泊し、明日は早起きしていよいよピラキア山に上ることになる。大精霊“炎（ホノオ）”の扉は、ピラキア山の山頂付近、キグリスへ向かう山道から多少外れたところにある、らしい。
明るい草原の街道を乗用陸鳥（ヴェクタ）を走らせながら、四人で話をした。
というより、サラが一方的に自分やバートやリィルのことをキリアに話して聞かせ、バートとリィルは時々相槌を打っていた。
「バートのお父さまは強いのよ」
と、サラは自分のことのように得意げに語った。
「そして、息子のバートだって、お父さまの強さを受け継いで超一流の剣士なんだから」
「ちょっと……いや、かなり変わり者だったけどな、うちの父親」
とバートは言う。
「クラヴィス将軍の噂は色々聞いてるわよ」とキリア。
「そういえば、王宮でも『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＯＡＳＩＳ』でも会えなかったけど……」
「……」
バートとリィルは顔を見合わせた。クラヴィス将軍失踪の件は、キグリスには伝わっていないはずだった。バートはサラに無言で『余計なことは喋るなよ』という合図を送った。

＊

父親の話題が出たので、バートは父親のことを思い出していた。
バートの父親は変わり者だった。口数が少なく、自分のことはあまり語らなかった。父親の素性、出身地すら不明だった。母親ユーリアと結婚してピアンに落ち着くまでは、パファック大陸の各地を流れていた、と聞いた。
そんな色々怪しい父親だったが、何故かピアン王宮内での人気は高かった。炎の精霊剣技の腕はピアン随一と言われ、ピアン国王も絶大な信頼を寄せていた。口数の少ないところも周囲には「神秘的」などと思われていたらしい。バートの父親は何者も無条件で虜にしてしまうような、不思議な魅力を備えていた。
そんな父親が、ある日突然、ピアン王国から姿を消してしまったわけだが、ピアン王女であるサラにも、親友であるリィルにも話していなかったことがあった。
ある晩、バートが自室で寝ていると、階下から怒鳴りあうような声が聞こえてきた。バートはそっとベッドを抜け出し、階段を下りた。怒鳴りあいの声は父母の寝室の中から聞こえてきた。怒鳴っているのは母親ユーリアの声だった。父親も何か言い返しているようだった。普段は口数の少ない父親だったが、その日は珍しく良く喋っていた。
（こんな真夜中に夫婦喧嘩かよ……。起きちまったじゃねーかっ）
喧嘩の内容についてはバートは興味なかった。バートは階段を上り、自室に戻った。あの二人が本気で喧嘩するなんて珍しいなと思いながら眠りについた。
バートの父親が「消えた」のはその翌日のことだった。
母親は心当たりについては「知らない」と繰り返すだけだった。喧嘩の原因については、未だ母親から聞き出せずにいる。バートとしてもあの夫婦喧嘩は聞かなかったことにしておきたい。

（4）

草原を左右に見ながら進む街道は、いつしか緩やかな上り坂になっていた。青々と茂る広葉樹の本数がだんだん増えてきて、草原の景色はいつしか森に変わっている。木漏れ日が森に落ちる中乗用陸鳥（ヴェクタ）を走らせ、バートたちは予定通り薄暗くなりかけた頃にピラキア山脈の麓（ふもと）に辿り着くことができた。ピラキア山へ上る山道の手前に宿泊できる木造の小屋が建っている。バートたちは二匹の乗用陸鳥（ヴェクタ）の綱を木に結び、それぞれ荷物を持って小屋の中に入った。中には二段ベッドが四組備え付けてあり、中央には大きめのテーブルと椅子が八つ。梯子（はしご）が立てかけてあって、ロフトに上れるようにもなっていた。四人は自分のベッドを決めて荷物を放り出し、ベッドにつるしてあったランプに灯りをともすと保存食をテーブルに並べ始めた。

「明日は早く起きないとね」

四人でテーブルについて、早目の夕食をとりながらキリアは言った。

「明るくなったらすぐにでも出発して、暗くなる前に下山しないと、山の中で一泊するはめになるからね」

「じゃあ俺、今日は早く寝よ」

リィルが言うと、バートとキリアは力いっぱいうなずいた。

＊

早朝。窓の外が薄明るくなり始めた頃、バートは誰よりも早く目覚めた。バートはわりと寝起きは良いほうだった。ベッドの上で大きく伸びをして、幸せそうに眠るリィルを叩き起こそうとして、まだ良いかと止めておいた。外の水場で顔を洗おうと思い、靴を履いて立ち上がって小屋の戸を開け外に出た。外は少しひんやりとしていて、霧のためうっすらと白かった。

どくん、と何故かバートの心臓が音を立てた。何故？と思ったとき、バートの両目は、前方に立つ男の影を捉えていた。

どくん。再び心臓が音を立てる。
男はゆっくりとこちらに歩み寄ってきた。背が高い。バートと同じ黒い髪を長く伸ばして、後ろで結んでいる。赤い軍服に身を包んでいる。その軍服は、どこかで見覚えがあった。ピアンの軍服では、ない。
「なんで……」
バートはようやく声を絞り出した。
「バート」
男はバートを真っ直ぐに見つめてバートの名前を呼んだ。
「父親……」
バートは信じられない気持ちで呟いた。これは夢なのだろうか。現実なのだろうか。
「バート。久しぶり」
「うん。久しぶり」
握り締めた拳が汗ばんでくる。確かに男は、バートの父親だった。
「……なんで……ここに？」
バートは尋ねた。
「バートを、迎えに来た」
父親は答えた。
「迎えに……？　ってか、良く、俺がここにいるって、わかったな」
「うん。わかった」
バートの記憶の中に居た父親と、同じ姿。同じ声。同じ口調。何もかもが懐かしかった。でも、素直に再会を喜ぶのは早い。父親には聞きたいことがたくさんある。
「父親……」
「何？」
「迎えに来たって……、今頃……今頃、今頃になって……今までどこで何してたんだよおっ！」
あふれ出てくる思いをバートは吐き出し、父親にぶつけた。
「『ガルディア』に、いた」

父親は答えた。
「ガル……ディア……」
バートは呟いた。聞いたことがある……確か、サウスポートで。赤い翼、赤い髪の『アビエス』とかいう異形の敵。アイツが確か『ガルディア』と……そういえば。父親が着ている軍服。それを、アビエスも着ていなかったか？
「そう、いう……こと、かよ」
バートは呟いた。あの日、サウスポートの兵士に話を聞いたときから、薄々覚悟はしていたのだ。いつかこういう日が来るのではないかと。
「オレは、『クラリス』。ガルディアの、将をやっている」
父親は言った。
「じゃあ……、サウスポートを襲ったやつらの……仲間だったってのか？　父親……」
「そう」
父親――クラリスの身体が、薄赤い光を放った。次の瞬間、バートはクラリスの背に、赤い翼が生えているのを見た。異形の者である証（あかし）の、赤い翼。
「……」
バートは言葉も出ずにしばらくその翼を眺めていた。父親も口を開かなかった。長い長い沈黙の時間が経過した。
「その翼は……」
バートはようやく口を開いた。
「消すことも、できるんだな……」
「できる」
「翼消したら……俺や母親と十年以上も一緒に暮らしたり、ピアンの将軍やったり、できるんだな……」
「……」
クラリスはわずかに表情を曇らせた。
「父親は……ピアンを、裏切ったんだな！」

バートは叫んだ。
「……オレは、」
「騙してた！　王の信頼を得といて……だろ？　その通りだろ？
反論できっかコノヤロー！」
「『ガルディア』の将として、命令に従っただけ」
「うるせーっ！」
バートはぜいぜいと肩で息を切らせていた。頭の中を色々な思いがぐるぐると駆け巡る。母親の顔が浮かぶ。ピアン王の顔も。
「だから、バート」
「うるせえ！　何が『だから』だっ！」
「一緒にガルディアに、帰ろう」
「黙れっ！」
「バート」
「……何だよっ」
「バートは、オレの息子」
「……それが、何だよっ」
「ガルディアの血からは、逃れられない」
クラリスは手を伸ばしてバートの腕を掴んできた。反射的に振り払おうとしたが、凄い力で掴まれて振り払えなかった。父親の手が、熱い。掴まれた腕が熱い。身体中が、なんだか熱い。何か熱いものが身体の中に流れ込んでくる――。バートは思わず叫び声を上げていた。
「何……しやがるんだ……！」
ようやく父親の手を振り払って、バートは父親から離れた。身体が重い。ふらついてその場に倒れこみそうになるのを辛うじてこらえた。クラリスはバートをじっと見つめて、わずかに首を傾げた。
「バート」
「何だよ」
「どうしても、オレと来ない？」
「ああ？　当然だろっ！」

「……そうか。残念」
クラリスは言った。

＊

「クラリス将軍」
木陰から女性が姿を現した。茶色の真っ直ぐな髪は肩より上あたりで切り揃えてある。その女性を、バートは良く知っていた。
「え……エルザ姉ちゃん？！」
「交渉は決裂？　……まあ、相手はバートだもんね」
エルザはクラリスからバートに視線を移すと、にっこりと微笑んだ。
「お久しぶりね、バート」
バートは頭が痛くなってきた。何故、敵に捕まったはずのリィルの姉がこんなところに居て、バートの父親――ガルディアの将に『将軍』なんて呼びかけているのだろうか。
「……無事だったんだな。エルザ姉ちゃん」
「まあねー」エルザは言った。
「無事だったのは良いけど。こんなところで何やってんだ……？」
「クラリス将軍のお手伝いよ」
「……というと？」
「やあね、私の口から語らせるつもり？」
エルザはくすくすと笑った。
「エルザ」
クラリスがエルザに声をかけた。
「はい、将軍」
「帰ろう。今のバートは、いくら言っても、来てくれそうに、ない」
「了解」
エルザはクラリスの首に手を回す。クラリスはエルザを片手で抱きかかえると、赤い翼を広げた。

「じゃあ、元気で、バート」
クラリスはバートに言った。
「あっそうだバート」
エルザがふと思い出したように言ってきた。
「機会があったらリィルに伝えといて。私は元気でやってるから、って」
クラリスは赤い翼を広げ、エルザと共に空高く舞い上がった。バートはそれを声もなく見つめていた。

（5）

バートはしばらくその場に固まっていたが、二人の姿が完全に見えなくなると、その場にへたり込んでしまった。はあ、と大きく息をつく。全身に嫌な汗をかいていた。
突然の、父親の来訪。告げられた真実。最後に出てきたエルザ姉ちゃんがトドメをさしてくれた。
「あったま、いてえ……」
バートはその場に仰向けに寝転んだ。霧はいつの間にか晴れていた。緑色の森の中だった。真上には薄青色の空が見えた。
「……バート」
遠慮がちな声が降ってきた。サラが真上から、心配そうにバートを覗き込んでいた。バートはがばっと身を起こした。
「サラっ。……見てたのか」
サラはゆっくりとうなずいた。
「いつから？」
「……ごめんバート。私も見てた……」
サラの後ろからキリアも姿を現し、こちらに歩み寄ってきた。
「っ、キリア……！」
「バートの怒鳴り声で目が覚めてね。何事かと思ってサラと外に出てみたら……」

「……」
「大体の事情は聞かせてもらっちゃった。……将軍と一緒にいた人、リィルのお姉さん？」
「……そういや、リィルは」バートは尋ねる。
「多分、まだ寝てると思う。起こしてこよっか」
「いや、俺が起こすよ」
と言って、バートはふらふらと立ち上がった。
「顔色悪いわよバート……。大丈夫？」
サラが心配そうに尋ねてきた。バートは小さくうなずいて、小屋のほうへ歩き出した。

＊

リィルはいつものようにバートに叩き起こされ、開かない目をこすりながらあたりを見回した。テーブルの上にはもう四人分の朝食が並べられ、キリアとサラは席についてこちらを見ていた。
「ごめん……。今日は早く起きるんだっけ……」
リィルはのろのろと立ち上がると席についた。四人でしばらく黙々と朝食を食べた。寝起きだからだろうか。みんな静かだった。
「リィル、」
と、バートが話しかけてきた。
「俺、さっき父親に会ったんだ」
「ふーん、父親さんに……って、ええっ？」
リィルはパンを喉に詰まらせかけて、慌てて水で流し込んだ。
「父親が、俺に会いに来たんだ。あとエルザねーちゃんにも会った」
「……ぶっ」
リィルは飲んでいた水を噴き出しかけた。
「もう帰っちゃったけどな、二人とも。あ、エルザねーちゃんからリィルに伝言。『私は元気でやってるわ』――だったっけ。確かに伝えたぞ」

と言って、バートはがたりと立ち上がった。
「ごちそうさま」
「ちょっとバート、どこ行くのっ」
外へ出て行こうとするバートにキリアが慌てて声をかけた。
「外の水場。……頭冷やしてくる」
「待てよっ、父親さんと姉貴の件、一体どういうことなのか説明……」
「サラとキリアに聞いてくれ」
バートは言い捨てると振り返らずに小屋から出て行ってしまった。
「……ええと……」
リィルはサラとキリアを交互に見ながら尋ねた。
「俺が寝ている間、一体何が……？」

＊

サラとキリアから話を聞いて、リィルは大体の事情を呑み込んだ。すぐには信じられない話だったが。
「要約すると、バートの父親さんは実は『ガルディア』の将軍で……俺の姉貴が同行してた、と」
「そういうことだと思う……」とキリア。
「とりあえず、無事だったんだな、姉貴は。それは……良かったかも」
「そうね……」
サラがうなずいた。
「姉貴は……姉貴だからな。うん。それよりも問題は……クラヴィスさんのこと、か」
バートが受けたであろう衝撃のことを考えると、心が痛む。
「バート、大丈夫かしら……。帰ってくるの遅くない？　見てこようかしら」
サラが立ち上がりかけたとき、小屋の扉が開けられてバートが戻

ってきた。バートの髪の毛はびしょびしょに濡れていた。黒髪から滴り落ちる水が上着の肩のあたりを濡らしていた。
「良しっ！」
バートは元気に叫んで、三人に笑いかけてきた。
「頭も冷えたし、吹っ切ったし。もう大丈夫だ。さっ、準備できたら出発するぞっ」
「バート……」
「どーしたんだよ。もうメシ食い終わったんだろ？　さっさと大精霊”炎（ホノオ）”に会いに行くぞっ」
バートは自分のベッドの上に広げてあった荷物を手早くまとめて鞄に詰め込むと、先行って待ってるぜ、と言いながら小屋を出て行った。
「バート、髪拭かないと風邪ひくわよ」
「こんなん自然乾燥で乾くさっ」
小屋の外からバートの元気な声が返ってきた。
「……重症だ……」
リィルはサラとキリアと顔を見合わせて、はあ、とため息をついた。
「重症……、なの？　もしかして、空（カラ）元気？」
キリアが言うと、リィルとサラは大きくうなずいた。
「なるほど。あれが空（カラ）元気ってやつなのね」
変なところでキリアが関心する。
「まー、本気で元気なくしちゃうよりはましかな、うん。俺たちもいつまでも沈んでたって仕方ない。元気出そう」
リィルの言葉に、キリアとサラはうなずいた。

炎の扉？

（1）

四人は二匹の乗用陸鳥（ヴェクタ）に乗って山道を進んだ。上り坂なので、速度はさすがに平地を進むときと比べてがくっと落ちている。一応、ヴェクタでも歩きやすい『道』にはなっているのだが、道の状況や傾斜次第では、四人はヴェクタから降りてヴェクタを歩かせながら進まなくてはならなかった。

天気は良く、時々通り過ぎる風の流れは気持ちが良い。時々木々が開けて見晴らしの良いところに出る。眼下には、今まで通ってきた街道や森や草原が広がっていた。

バートは元気で、いつもより良く喋っていた。リィルたちもそれに合わせて良く喋った。四人は朝の出来事など何もなかったかのように振る舞った。

「ここだわ」

太陽の位置からすると、昼を少し回った頃だろうか。マップを眺めていたサラがそう言って乗用陸鳥（ヴェクタ）を止めた。普通に進んでいたら見逃すところだったが、そこは分かれ道になっていた。良く見ると朽ちかけた木でできた方向板が周囲の木々に溶け込むように立っていた。

分かれ道の一方は今までどおりの山道で、ピラキア山頂、キグリス方面に続いている。もう一方は細くて狭くて進み辛そうな、ほとんど獣道だった。

「一応書いてあるわね。『大精霊”炎（ホノオ）”の眠る地』こちら……だって」

キリアが方向板に彫られていた文字を読み上げた。

四人は細い道のほうに乗用陸鳥（ヴェクタ）を進め――、やがて、『大精霊”炎（ホノオ）”の眠る地』に辿り着いた。木製の小さな看板にそう書いてあっ

た。四人の目の前には、切り立った高い崖があった。その崖の岩肌に、金属製の古びた『扉』がはめ込まれていた。扉には凝った芸術的な文様が刻まれており、バートには読めない文字も彫られていた。

「これが……！」

と言って、サラは絶句した。その表情は感動のあまり言葉も出ない、といったふうだった。

「へええー。これは……確かにちょっとしたもんだね」

リィルも感動の声を上げた。

「ただの金属製の扉じゃんか。そんなに面白いか？」

バートは首を傾げる。

「何言ってるの！　バートは何も感じないの？　古代のロマンとか……精霊たちの息吹とか……」

うっとりとサラは言う。

「うーん……」

バートは腕組みをして考え込んだ。

キリアは扉に彫られている文字が気になるらしく、熱心に目で追っていた。ついには鞄から本のようなものを取り出して扉の文字と見比べ始めた。

「キリア、読めるの？」サラが尋ねる。

「残念ながら」キリアは首を振った。

「『古代語』に似てるなと思ったんだけど、違うみたい」

「古代語なら読めるんだ？」とリィル。

「まあね」

キリアは言って、本を閉じて鞄にしまった。

サラは金属製の扉に手を伸ばし、ぺたぺたと触っていた。扉には金属製の取っ手が取り付けられている。サラはそれを掴んで、思い切り手前に引っ張った。扉はびくとも動かない。今度は思い切り押してみる。

「やっぱり開かないわね……」

サラは残念そうに言った。

「まあ、『誰にも開けられない』って言われてる扉だからね」とリィル。
「でも、気はすんだか？」バートはサラに尋ねた。
「ええ」サラは笑顔でうなずいた。
「ありがとうみんな。こんなところまでつき合わせちゃってごめんなさい」
「ううん」リィルは首を振った。
「来て良かったって、俺は思ってる。良いものが見れたよ」
「同じく」キリアも満足そうに言った。
バートは手を伸ばして扉に触れてみた。ひんやりとした金属の感触。
「……？」
少し、扉が動いた気がした。なんだか普通の家や部屋の扉に触れているような感じがした。
（本当に誰にも開けられねーのか？　これ）
バートは取っ手を握って手前に引いてみた。
扉はあっさりと開いた。

＊

「……」
バートとリィルとサラとキリアは呆然と開いてしまった扉を見つめていた。
「バート……」
リィルがおそるおそるといった感じで口を開いた。
「何、やったんだ……？」
「いや……普通に手前に引っ張っただけだけど……」
サラがバートと同じように扉の取っ手を握って扉を動かそうとしてみるが、扉は動かない。リィルとキリアも同じようにやってみた。やはり、扉は動かない。

「バート……すごいっ！」
サラが顔を輝かせながら叫んだ。
「これって……これって。伝説？　運命？　選ばれた勇者とか？」
「知るかっ、そんなん」
バートは言い切ったが、開いてしまった扉の奥に何があるか、興味が湧いてきた。伝説の通りなら、この奥には大精霊”炎（ホノオ）”が眠っているはずなのだ。
バートは開いた扉の奥を覗き込んだ。暗くて良く見えない。サラは乗用陸鳥（ヴェクタ）にくくりつけてあったランプを取り外していた。
「もっちろん、中、入るわよね？」
「うんっ」
キリアが弾んだ声で答えた。バートも異論はなかったのでうなずいた。
「……俺、やめとく」
と言ったのはリィルだった。
「ええええっ？」サラが驚きの声を上げた。
「どうして！」
「何か……ダメなんだ、俺だと……多分」
リィルの声は弱々しかった。
「どういうことなの？」とキリア。
「……みんなは、何も感じないんだろ……？」
「感じるって、何を？」とバート。
「てことは、やっぱり俺だけなんだな……入れないのは」
リィルは力なく言った。
「？」
「ごめん、俺、ここで待ってるから」
と言って、リィルは扉から離れたところにあった石に腰かけた。
「三人で見て来てよ。大精霊”炎（ホノオ）”。で、後で感想よろしく」
「……」
バートとサラとキリアは顔を見合わせた。

＊

バートとサラとキリアは扉の中に入った。中は人ひとりぶんくらいの幅の通路になっていて、通路がずっと奥に延びていた。先頭のバートが前方をランプで照らしながら進んだ。

通路の中はすごい熱気だった。肌を直接焼かれているような、乾いた暑さだった。

「アイツ、昔っから、暑いの苦手だったからな……」

バートは呟いた。

「夏は良くばててたっけ」

「そういえばそうね……」とサラも言う。

「リィルのこと？」キリアは尋ねた。

「そうか、リィルは『水』属性だっけ。だからなのかもしれないわね……」

『水』属性の者は、『水』に強く『火』に弱い。『火』属性の者は、その逆だった。同じことが『風』と『土』にも言えた。

しばらく進むと、通路は行き止まりになっていた。さっきと同じような金属製の扉に行く手を阻まれている。バートは手を伸ばしてその扉を開けた。やはりあっさりと扉は開いた。

途端に通路がまぶしい光に照らし出された。扉の向こうは明るかった。

「うあ……」

バートは思わず声を漏らしていた。

そこは、四方を石の壁に囲まれた「部屋」だった。高い石の壁にはぎっしりと「文字」が掘り込まれている。高い天井からはまぶしい光が降り注いでいた。

そして、部屋の中央には、この世のものとは思えない、奇妙な物体（モノ）が、あった。粘土で適当に作った像に、何本もの管を突き刺し、いくつもの石を埋め込んだような。それは薄赤く輝き、凄まじい熱

を発していた。
「……っ」
バートの身体が寒くもないのに震えた。心が騒(ざわ)めいた。見てはいけないものを見てしまったような……。目を逸らしたいのに逸らせない。胸が一杯になって、息が詰まるような苦しさ――。
三人は不思議な光景を目前にして、ただただ、絶句するしかなかった。
「な……ん、なの……？」
長い長い沈黙の後、キリアがかすれた声を上げた。
「これが……大精霊”炎(ホノオ)”……なの……？」
サラが呆然と呟く。
「……サラ。バート……」
キリアが二人の名を呼んだ。
「帰ろう……？　これは……私たちが気軽に踏み込んで良い世界じゃ、無い……！」

（2）

リィルは石に腰かけ、「”炎(ホノオ)”の扉」をぼんやりと眺めながら考え事をしていた。バートの父親――ガルディアの将と行動を共にしていたという、姉エルザのことを。バートはエルザに会ったのに、自分は会えなかった、その意味を。たまたま自分が小屋の中で眠っていたから？　姉は自分がすぐ近くにいたことを、知っていたのだろうか。知らなかったのだろうか。例えば、あのとき、バートの隣に俺がいたら？　……意味なんてないのかもしれない。考えすぎなのかもしれない……
そもそもクラヴィスさんは何故、バートがあそこにいたとわかったのだろう。尾けてきていた？　それにしては、早朝に――。
ふいに扉の向こうから三人が現れた。三人とも――バートも、サラも、キリアも何故か浮かない顔をしていた。バートが扉を元通り

に閉めた。
「待たせたな、リィル」
と言って、バートが歩み寄ってきた。
「お帰り。大精霊”炎（ホノオ）”には会えた？」
「……うーん」バートは口ごもった。
「アレ、一体何だったんだろうな？」
バートは振り返ってキリアとサラに声をかけた。
「さあ……」
と言って、キリアは首を傾げる。
「アレが大精霊”炎（ホノオ）”……なのか？」
「だとしたら……想像してたのとだいぶ違ったわ……」
サラが言った。リィルはサラの「想像」にちょっと興味があったが、敢えて突っ込まないことにした。
「ええと。中で一体、何が？」
リィルは聞いてみる。
「何とも言えないわね……」とキリア。
「ああ、もう、良くわかんない。いっそのこと見なかったことにしておきたいくらい」
「？？」
なんか、この三人からこれ以上詳しいことを聞き出すのは難しそうだ――と、リィルは諦めた。三人は扉の奥で一体何を見たのだろう。

＊

「さて、と」
何かを吹っ切るようにバートは言った。
「大精霊”炎（ホノオ）”も見たし……なんか名残惜しいような気もすっけど、そろそろ帰るか」
「そうだね」

リィルはうなずいて、立ち上がった。
「そういえばここってほとんどキグリスとの国境だけど……キリアはどっち側に下りる？」
「そうか。キリアとはここらでお別れだな」
「ちょっと勝手に決め付けないでよっ」
反射的にキリアはバートに言い返してしまったが、自分がかなり微妙な立場に立たされていることに気が付いた。勢いでここまで来てしまったものの、自分は元々、ピアン王女とキグリス王子を結婚させるためにピアンに来たのだった。あまり乗り気ではなかったのだが、命のため、仕方なく。そして逃げ出した王女を捕まえたとき、婚姻を拒む王女に同調してしまった。今更サラにキグリス王子との結婚を強要することなどできない――。
「……やっぱり、キグリスに帰るしか、ないかな……」
キリアはぽつりと呟いた。
「サラは、キグリスに行ってうちの王子と結婚する気なんて、ないでしょ……？」
「……」
「うん、止めといたほうが良いと思う。結婚は一生のことだしね。私、大人しくおじいちゃんとキグリス王に怒られてくることにする」
「キリア……」
「そもそもうちの出した条件が無茶だったのよ。まったくピアン王女の気持ちも考えないで、これだから幹部の考えることは――。だからサラは悪くない。そんな顔……しないで」
キリアはサラに微笑みかけた。
「短い間だったけど、一緒に旅できて楽しかった。本当にありがとう。私今までこういう……旅、したことなかったから……本当に楽しかった。大精霊”炎（ホノオ）”も見れちゃったし、もう言うことないって感じ」
「……」
「乗用陸鳥（ヴェクタ）……一匹、貰ってって良いわよね？　そっちは残りの一

匹に三人乗りで帰れるわよね？」
「それはちょっと図々しいんじゃないか」
とバートが言ってきた。彼のことだから、多分、悪気はないのだろう。
「図々しいとは何よ！　良いじゃない。この乗用陸鳥（ヴェクタ）、元々私がキグリスから乗ってきたヴェクタなんだからっ」
今ここにいる二匹の乗用陸鳥（ヴェクタ）は、正確にはリンツで「乗り換えた」ヴェクタだった。リンツの町の南側の入口にヴェクタを停め、北側の出口から別のヴェクタに乗って来たのだった。ピアンにもキグリスにも、このような「乗用陸鳥（ヴェクタ）乗り換え制度」がある。ヴェクタを町中に停めたことが証明できれば、別のヴェクタに乗り換えて町を出ることが可能になるのだ。
「確かキグリス側って、山下りるとすぐに村があるんだったよね。キリアだけ徒歩で下山して、村でまた別の乗用陸鳥（ヴェクタ）を手配して帰れば良いのでは？」
「……リィルまでそういう酷いこと言うのね」
こいつらとこういう会話をすることも、もうできなくなっちゃうのか――。キリアはなんだか無性に寂しくなってきた。
「冗談だって」リィルは笑った。
「キグリス側の麓（ふもと）の村……何ていうんだっけ。そこまで乗用陸鳥（ヴェクタ）で送っていくよ」
「ええー。それはさすがに悪いわよ」
慌ててキリアは手を左右に振った。
「……ねえ、キリア」
今まで黙り込んでいたサラが口を開いた。
「ん？　何、サラ」
「あたしも……キグリスに行って、良いかしら？」
「え」
キリアはびっくりしてサラを見つめた。
「あたし、キグリス首都に行こうと思うの。停戦同盟の使者として」

「えええっ！」
キリアは思わず大声を上げた。バートもリィルもサラの突然の発言に驚いていた。
「あたし、色々考えたんだけど……」と、サラは言う。
「キグリス首都に行って、王宮に行って、キグリス王と王子に会おうと思うの。そしてちゃんと話をしたいの。ピアンとキグリスの、これからのことについて」
「サラ……」
キリアはサラに尋ねた。
「まさか、政略結婚に応じるって意味じゃ、ないわよね……？」
「もちろんよ」と、サラは微笑んだ。
「あたしは若いし、まだまだこれからだし、だから結婚はまだしません、って言うつもり」
「そっかあ……」
それは良いことかも、とキリアは思った。ここはもう国境だ。ピアン首都に帰る時間があればキグリス首都に行ける。そして、サラの説得がキグリス王と王子に通じれば、お互いに良い関係を保ったまま、サラに政略結婚を強いることなく、ピアンとキグリスの停戦同盟が成立する。
「そういうことなら。良いわよ、サラ。キグリス首都まで連れてってあげる」
「ありがとうキリア！」サラが喜んだ。
「……良いのかなー、王女の独断で」
リィルが独り言のように呟いた。
「大丈夫よ」サラは自信有りげに言い切った。
「お父さまはキグリスとの停戦同盟には乗り気だったもの。一番大切なのは、そこだと思うから」
「そっか」とリィルは言った。
「じゃあ、俺たちもキグリス首都まで付き合うよ。王女の護衛ってことで」

「本当っ？」
サラが顔を輝かせた。
「バートも？」
「ああ、良いぜ」
やけにあっさりとバートもうなずいた。
「どーせピアン首都に帰ったって、口うるせー母親に店の手伝いやらされるだけだからな」
「じゃあ、決まりね！　四人でキグリス首都に行くってことで」
サラが声を弾ませた。キリアはうなずいた。もうしばらくこの四人で旅を続けられるということが、じんわりと嬉しかった。

旅の途中・再会

（1）

リネッタは山の麓（ふもと）の小さな村で兄と一緒に暮らしている。「ギール」という名のこの村はピラキア山脈の北側の麓にあり、キグリス王国最南の村である。ピラキア山脈を越えて南側は、キグリスではなくピアン王国領になっている。

リネッタは十八歳で、いつもは「ワールドアカデミー」の寮で生活している。ワールドアカデミーはキグリスのとある山中にある教育機関だが、国籍に関係なく入学することができ、そこでは様々な教育を受けることができる。リネッタは今は春期休暇ということで、兄の暮らすこの村に帰ってきていた。

久しぶりの村でののんびりとした生活に馴染んできたある晩のこと。リネッタは思いもかけない懐かしい人物と再会することになった。ワールドアカデミーの古い友人、キリアという名の少女である。

キリアは旅の途中でこの村を通りかかり、リネッタの兄の家があることを思い出して訪ねてきたのだった。キリアもまさかリネッタがここに来ているとは思っていなかったらしい。二人は偶然の再会を喜び合い、思い出話に花を咲かせた。

＊

キリアはリネッタの同級生だったが、十歳のときにワールドアカデミーを自主退学し、「大賢者の塔」というところに引き取られていってしまった。彼女の身内曰く、「ワールドアカデミーはキリアには合わない」ということらしい。リネッタにとってキリアは無二の親友だったから、キリアがいなくなってしまったときの寂しさといったらなかった。

「大賢者の塔」は、キリアの祖父、キルディアスが暮らす塔である。キルディアスはキグリスの大賢者と呼ばれており、キリアはその孫で、跡継ぎである。キルディアスの娘、すなわちキリアの母はキリアが小さい頃に亡くなった、と聞いた。キリアの父はキグリス王宮に仕えている宮廷剣士で、リネッタの父の同期である。ついでにリネッタのもう一人の兄は、大賢者の塔でキルディアスに仕えていたりする。

　というわけで、リネッタの一族とキリアの一族はけっこうあちこちで繋がりがあったりするのだが、リネッタはここ数年の間、キリアにはほとんど会えていなかった。塔では一般の者が塔の内部の者に会うことはできず、キリアはほとんど塔の外に出してもらえない、はずなのだ。それが、聞いてみると、キリアは塔を出てずいぶん長い旅をしている途中なのだという。

「ええと、塔を出て、国境越えてピアンの首都に行って、リンツに寄って、またピラキア山脈越えてここに来て、これからキグリスの首都に行くところなの」

「良く塔出してもらえたね。そんなに長い間」

「最初は『任務』だったのよ」とキリアは言う。

「おじいちゃんとキグリス王に頼まれて、『ピアンの王女を連れて来い』って。でも途中で事情が変わっちゃってね」

「事情が？」

「ピアンの王女と、キグリス（うち）の王子の話は知ってるんでしょ？」

「うん。ワールドアカデミーで、噂で」リネッタはうなずいた。

　ピアンとキグリスは昔から仲が悪かった。しかし、サウスポート襲撃事件をきっかけに、停戦同盟を結ぼうという話が持ち上がったのだ。そして、そのために、ピアン王女とキグリス王子を結婚させる――。

「だから私がピアンに王女を迎えに行ったのよ」とキリア。

「で、おじいちゃんが王女に会いたがってて、まずは塔に連れてこいって言うの。それからおじいちゃんが直々にキグリス首都へお連

れするって」
「あれ？　でもキリア、塔には当分行かないって」
「そうなの。事情が変わっちゃったのよ」
「キグリス首都には行くんだよね？」リネッタは首を傾げる。
「そこなのよね……」キリアは苦笑した。

＊

キリアは今は四人で旅をしていると言った。キリアと、同年代くらいの少年が二人と、ちょっと年下の少女が一人。美しい金色の長い髪に、青い瞳の可愛らしい少女――ピアン王国王女サラ。会うのは初めてだった。王家マニアの兄サイナスは実物のピアン王女を目の前にして失礼なくらい大はしゃぎだった。
「ピアン」については、キグリス人は実はあまり良い印象を持っていない。国境に位置するこの村だって、過去に何度かピアン軍の侵略を受けたことがある。しかし、今はピアンとお互い仲良くやっていこうという風潮があり、……いやそんな理屈などどうでも良く、リネッタはこの金髪の少女に対してどうしても悪い印象を持つことができなかった。自分より年下の少女が国家のために国境を越えて頑張っている姿を見ると、素直に応援したくなってしまうのだ。キリアも多分、同じ気持ちなのだろう。
「サラがキグリスとの同盟はともかく、政略結婚に乗り気じゃなくてね。というかはっきりと拒んじゃってるの、政略結婚は」
「まあねえ……。政略結婚だもんねえ……」リネッタはうなずく。
「確かにわたしだったら嫌だな。政治の道具にされて本当に好きな人と結婚できないってのは……。あれ、じゃあ姫様は何しにキグリス首都に行くわけ？」
「キグリスと同盟結びに行くのよ、ピアンの使者として」
「政略結婚は無しでって？」
「最初はサラ、政略結婚が嫌でピアン王宮飛び出しちゃってたのよ、

あ、ここだけの話ね」
　キリアは声をひそめた。
「それを追いかけて、王女を捕まえて、それから色々あってね……サラ、前向きに頑張るって言うの。ピアンの王族として、キグリス王に直接、自分の意見をぶつけたいって」
「そうなんだ。で……ピアン王や幹部もそういう考え、ってことでオッケーなわけ？」
「さあ……」
「さあ、って」
「実は今回のキグリス首都行き、完全にサラの独断なのよね」
　キリアはため息をついた。
「さっき、この村からピアン王に伝書は出してきたけど、未だ王のお許しは出てない状態なのよ」
「それって……まずくない？」
「まずいかも」キリアは笑った。
「でもね。私はサラが間違ってることとしてるとは思わない。どっちかというと限りなく正しいこととしてるんじゃないかって思うの。だから、私はサラにとことんまで付き合うつもり」
「そっかあ……」
　リネッタはうなずいた。そういうキリアとサラの関係は素敵だと思った。
「うん、わかった」リネッタは声を弾ませた。
「上手くいくと良いね。頑張って！　私も応援するから」

＊

「で、リネッタ聞いて。この旅最大のネタを」
　キリアがちょっと楽しそうに言ってきた。
「ネタ？」
「……あ。ネタなんて言っちゃあいけないのかな。でも凄いのよ。

伝説の大精霊”炎(ホノオ)”を……見てきちゃったのよ、私たち」
「……えええ？」リネッタは声を上げた。
「本物の？」
「う。改めて本物かと聞かれると……」
キリアはちょっと困ったように言った。
「リネッタ、ピラキア山脈に『開かずの扉』ってのがあるの知ってるでしょ」
「奥に大精霊”炎(ホノオ)”が眠っているって伝説の……」
「そう」キリアはうなずいた。
「まあ、今まで誰も真偽を確かめられなかったわけだけど……扉が開けられなくて。でもその扉が開いたのよ」
「へええ。それって凄い」
「正確には、バートが開けたの。他の三人が開けようとしてもだめだったんだけど、バートが開けようとすると開くのよ。不思議なことに」
「バートっていうと、どっち？」
「黒髪の、背の高いほう」
「彼って何者なの？」リネッタは尋ねてみた。
「まだちゃんと話してなかったっけ。ピアン王に仕える将軍の息子で、サラの幼なじみ」
「……なーるほど」リネッタはぴんときた。
「それだけ？」
「……鋭いわねリネッタ。でもごめん、私の口からはちょっと言えないの」
キリアはすまなさそうに言った。
「ああ見えて実は色々あったりするのよ、バートって……」
「あ。そうなんだ……」
そういう意味じゃなかったんだけど、と思いつつ、気を取り直してリネッタは続けた。
「で、中には伝説の大精霊”炎(ホノオ)”がいたんだ」

「……たぶん、ね」
「どんなのだったの？」
「うーん……」キリアは何故か口ごもった。
「何て言ったら良いか……。想像してたのとだいぶ違ったわね。ほんとにあれが『大精霊”炎（ホノオ）”』だったのかしら……」

＊

「キリア……。ずいぶん楽しい旅、してきたんだね」
リネッタは言った。
「聞いてる私もすっごく楽しかったし、キリアもホント楽しそうに語るんだもん」
「え。そうだった？」
「一緒に旅してる仲間が楽しいんだよね、きっと」
「そうなの……かな」
キリアは少し照れたように微笑んだ。
キリアはワールドアカデミーを出た後、長い間塔に閉じ込められて、ずっと不自由な生活を送っていた。そんな話をリネッタは大賢者に仕える兄から聞いていた。でも久しぶりに会ったキリアは、楽しそうに旅のこと、仲間のことを語ってくれた。リネッタにはそれが嬉しかった。
……今まで苦労してきた分、このままずっと、キリアにとって楽しい旅が続きますように――。
リネッタはそう願わずにはいられなかった。

（2）

次の日の朝、サイナスとリネッタとの六人での朝食の席で、急ぎの旅でないのならもう一泊していかないかと提案された。
「ちょうど今夜、河川敷で、年に数回しかやらないギール名物・春

の花火大会があるんだよ」
とリネッタが言った。
「河川敷？」
キリアは聞き返した。川ってどこを流れていたっけ、と頭の中でギールの地図を描いてみる。
「乗用陸鳥（ヴェクタ）で行くには近すぎるんだけど、歩いていくには遠すぎるんだよな」
リネッタの兄サイナスが腕組みして言った。
「乗用陸鳥（ヴェクタ）で行くのに近すぎってことはないでしょ」
リネッタが兄に言い返す。
「でも、乗用陸鳥（ヴェクタ）じゃあ芸ないと思ってさ」
「芸なんてどうでも良いよ。まさか歩いて行こうなんて言い出さないよね？」
「そりゃ流石にな。だから、人力二輪車（バイサイクル）で行こうと思って」
朝食を食べ終わって、六人はぞろぞろと庭に出た。サイナスが建物の裏からカラカラと二輪車（バイサイクル）を押して運んでくる。さらに二往復して、庭には三台の二輪車が並んだ。
「足りないじゃん」リネッタが呆れて言う。
「大丈夫、ほら、後ろに荷台がついてるから」とサイナス。
「男が漕（こ）いで、女の子は後ろ」
「げっ」
あからさまにバートが嫌そうな顔をした。リィルはやっぱり、と呟いて苦笑する。
リネッタいわく、「花火大会会場の屋台はけっこう混むから」ということで、夕方、キリアとリネッタとサラで夜食の買い出しに出かけた。肉体労働を引き受けてくれる男三人にせめて美味いものをおごってやろうというのだった。三人でハンバーグサンド六人分とから揚げを大量に買い込んだ。
家に戻ると、バートとリィルとサイナスがそれぞれの二輪車の前籠に点燈虫（てんとうむし）を取り付けているところだった。点燈虫（てんとうむし）は人のこぶしく

らいの大きさで、暗闇で白く光る。
「お。良い匂い」
から揚げの匂いを嗅ぎ付けてバートが近付いてきた。今はダメよ、花火見ながら食べるんだから、とキリアは言ったが、サラもリネッタも良いじゃんひとつくらい、揚げたてが一番美味しいんだから、と言って、結局、出発前に一人一個ずつつまむことになった。揚げたてのから揚げは、噛むと外の衣がかりっと音を立て、口の中に肉の味がいっぱいに広がった。
キリアはいつものキュロット・スカートからジーンズにはき替えた。日が落ちる前に家を出る。サイナスが緑、バートが赤、リィルが青の二輪車にまたがる。
「大丈夫？」
リィルの後ろの荷台にまたがるとき、キリアは思わず聞いてしまった。本当は「貧乏くじ引いちゃったわね」と言いたかった。リネッタ、サラ、自分のうち、一番重いのはどう考えても自分だった。そしてリィルはどちらかというと小柄なほうだった。まあ、あみだくじの結果だから今更どうにもならないし、敢えてしようとも思わないのだが。
「多分ね」
リィルは前を見たまま明るく答えた。言葉の内容とは裏腹に自信満々な様子だった。
「じゃ、しっかりつかまってろよ」
どこに？と一瞬思ったが、少し考えて、両手で荷台の金属を握ることにした。
リネッタを乗せたサイナス、サラを乗せたバートが次々に漕ぎ出した。キリアの二輪車も動き出す。身体が後ろに持っていかれそうになるのを慌てて腕に力を込めて戻した。リィルはキリアなど乗っていないかのようにぐんぐんスピードを上げる。最初はちょっと恐かったが、すぐに慣れた。その安定した走りぶりに、やっぱり男の子は力あるんだなあと感心した。

前方にかなり急な上り坂が見えたときは、リィルに言って下ろしてもらった。乗せてもらったお礼とばかり二輪車の荷台を押して走って坂を上る。上りきったらまた乗せてもらう。リィルは「このくらいの坂大丈夫なのに」と言うのだが。ちなみにバートはその坂をサラを乗せたまま軽々と上っていった。

夕陽の沈む道を三台の二輪車が進む。空の低いところは橙色（オレンジ）、高くなるにつれ薄暗青色になり、そのグラデーションが美しい。やがて、闇は徐々に濃さを増し、景色の明度が落ちていった。そしてあるとき点燈虫（てんとうむし）がぽっと灯りを燈（とも）した。

すっかり陽が落ちて真っ暗な中、小川にかかった小さな橋を渡った。少し進んだところで、突然サイナスが二輪車を止めた。続けてバートとリィルも止める。

「悪いけど、時間切れだ」

そう言ってサイナスは二輪車をUターンさせた。バートとリィルも続く。サイナスは橋の中央まで渡って二輪車を降り、リネッタにも「降りろ」と指示した。キリアも降りた。

「そろそろ最初の一発が上がる頃なんだ」

橋の欄干に片手を置いてサイナスが暗い空を指して言う。バートもリィルもキリアもサラもリネッタも、サイナスが指す方向を見つめ、そのときを待った。

まもなく遠くの夜空に音もなく赤い光の花がひらいた。

「「あっ」」

何人かの声が重なる。遅れてどん、という爆発音。サイナスが指していた方向とかなりずれていた。

「兄貴ぃーー」リネッタが非難の声を上げた。

＊

花火が次々に打ち上がる方向を目指して三台の二輪車が駆ける。そして六人は河川敷に辿り着いた。二輪車を止めて土手に上り、草

むらに座り込んで花火を見上げる。こんなに間近で見るのは初めてだった。暗い夜空の視界一面に光の花が次々とひらく。続いて、パパパパンという心地良い連続音。少し夜空が落ち着いた後、大きな一発が上がる。キリアは思わず身をかたくする。遅れてドン、と心臓を叩かれるような凄い音。すっかり圧倒されてしまって、口からこぼれたのは「はあ」という無声音だった。

花火大会というものは歓声を上げながらにぎやかに見るものだと思っていた。でも、実際はちょっと違っていた。冷めている、というわけではない。みんな静かに熱心に見ている。そして時おり「おお」という呟くような声が発せられる。

ふと、来る前に買い込んでおいたハンバーグサンドのことを思った。でも何故かおなかいっぱいで、取り出して食べようという気にはなれなかった。それでも一応隣に座っているバートに「食べる？」と聞いてみた。案の定「今はいーや」という答えが返ってきた。

そしてまた大きな一発が上がった。暗い空の高いところで火薬が爆発する。爆発音が身体を揺さぶる。正直なところ、少し恐怖も感じている。みんなで並んで座っていなかったら、自分ひとりだけだったら、その場から逃げ出してしまっていたかもしれない。大きな花火が上がるたびに、強敵と対峙し命のやり取りをするときのような緊張感を感じる。こんなことを考えているのは自分だけだろうか。皆の横顔をうかがうと、皆楽しそうに熱心に夜空を見上げている。

そして、全ての花火が打ち上がり終わり、また二輪車で帰路につくことになった。キリアは早足で二輪車のところまで歩いていって、青い二輪車にまたがった。

「あのー？」

遅れて辿り着いたリィルが怪訝そうに声をかけてくる。

「帰りは私が漕いであげる。さ、後ろ乗って乗って」

リィルは数秒間固まった後、思い切り反論してきたがキリアはサドルに腰掛けたまま動くつもりはなかった。リィルは諦めたのかため息をひとつつくと、バートとサラのところに歩いて行って何やら

話していた。しばらくして話がまとまったらしく、サラがこちらに歩いてきた。そして遠慮がちにキリアの後ろにまたがった。
「大丈夫？　あたし重いわよ」
キリアの背中でサラが言う。
「何言ってんの。サラが重いってんなら私はどうなるのよ」
キリアは思わず言い返した。
「それにキリア、誰か乗せて漕いだことあるの？」
「二輪車くらい漕いだことあるわよ。……けっこう昔だけど」
「……」
サラを後ろに乗せてキリアはペダルを踏んで漕ぎ出した。人ひとり乗せているので、漕ぐのに意外と力が要る。ふらふらのろのろ進むキリアの二輪車の横を、バートの二輪車が遠慮なくあっさり追い越していった。通りすがりに「お先にー」と、荷台の上からリィルが笑顔で手を振っていた。
「キリア、やっぱり代わるわよ」
後ろからサラが心配そうに声をかけてくる。
「大丈夫だって。だんだん慣れるから」
踏みしめるペダルは重かったが、不思議と心は満たされていた。後ろのサラと色々なお喋りをして、二人で声を上げて笑った。そうやって二人で点燈虫が照らす闇の中を進んだ。
途中でサラと漕ぐのを交代した。サラは可愛らしい外見の割に格闘術をやっていたりして力はある。サラに代わってから、青い二輪車はスイスイと進んだ。

＊

翌朝。ギールのサイナス宅に二泊したバートたち四人は、いよいよキグリス首都に向けて旅立つことになった。乗用陸鳥（ヴェクタ）に分かれて乗っても仕方がないので、四人乗りの大型ヴェクタに乗り換えて首都を目指すことにした。

「これ、餞別な」
と言って、サイナスは葡萄酒の瓶をキリアに手渡した。
「ありがとうございます、サイナスさん」
「気をつけてね、みんな。また遊びに来てね」
リネッタが名残惜しそうに言う。
「お前、春休み終わったらアカデミー戻るんだろ」
サイナスが妹に言と、リネッタはむぅ、と唸った。
「うう。そうなんだよね。でも、できれば、春休み中にもう一回くらい……」
「うんうん」キリアは笑顔でうなずいた。
「塔帰るときとか、近く寄ったら絶対寄るから。リネッタ、会えて嬉しかった」
「わたしも！」リネッタが顔を輝かせた。
「姫様にも、会えて良かった」
リネッタはサラを見て言った。
「首都までけっこうあるけど、道中、気をつけてね」
「うん。色々ありがとう、リネちゃん」
サラが笑顔になって言った。
「そうだな、ホント、みんな気をつけろよ」
サイナスが急に真面目な顔つきになって言った。
「ここは王女にとっては『国外』だからな。バート君、リィル君。サラ王女のこと、しっかり守ってやるんだぞ」
「はい」
リィルが言い、バートも大きくうなずいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0696c/

四精霊の伝説

2011年6月23日18時10分発行